

面倒くさがりな決闘者のARC—V物語

ジャギィ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

エクシーズ次元のハートランドにいる1人の少年…彼に名を忘れた青年が憑依するところから物語は始まる

※この作品は「面倒くさがりな直感系決闘者がゆくARCV物語」の大幅なりメイク作です

第12話	第11話	第10話	第9話	第8話	第7話	第6話	第5話	第4話	第3話	第2話	第1話
85	74	63	55	49	37	32	22	16	12	6	1

目次

第1話

「知らない天井だ」

意識が覚醒した僕はベッドに横たわりながらそう呟いた。言ってみたいセリフを言える機会だったからつい言ってしまったが、思いのほか僕は混乱しているみたいだ

「病院……じゃないな」

首だけを横に向けると白い壁に茶色い扉。勉強机と思わしきものが置いてあった。この時点で病院の内装とは大きくかけ離れていた

さらに細かく観察すると勉強机の上に見覚えのない教科書と見覚えのあるデツキケース、そしてデュエルディスク（ARC―V仕様である）が置いてあった。ここで違和感を1つ

よっこいしょとベッドから降りて立ち上がり、周囲を見渡すと視線がなんだが低いように感じた。違和感²

「アレ？」

極めつけになんだか聞こえる声も普段聞いているものとは違って高く聞こえる。トリプル違和感

おかしい、僕の声は相当低いはずだ。大塚○夫並みに低かったはずだ。ゴメンなさい嘘つきました。せいぜい小○Dより少し高いくらいです。でもこんな思春期の少年のような高い声でないことは間違いないで確かです…

「あ」

考え事をしながらふと右側を見ると大きな鏡が。そしてそこに写っていたのは……

「なあにこれえ」

朱色の髪色に、バリカンみたいな形の青紫の前髪がオールバックのように後ろ向きに伸びた奇抜な髪型の少年だった

「マジかー…」

デツキ、デュエルディスク、変わった髪型。これだけでここがどういふところなのかを理解できるが、確信に至ってない彼は後ろを振り向き

「……マジかー…」

つい先ほど鏡ごしで見た少年と赤いスーツにシルクハットのダンディなおじさんが笑顔で一緒に写っている写真を見てさらに脱力感が増した

もはや詰みと言って差し支えない状況だったが、それでも現実逃避したい彼は外の景色でも見て気持ちを落ち着けようとカーテンを開けて

シャー

「……マジかよ…」

逃れようのない現実にととう頭を抱えて唸った

2階の窓から見えた景色、街並みは近未来といえるほどに発展している街であり、シンボルともいえる巨大なタワーの天辺には同じく大きなハートがあった

街の名前はハートランド、次元の名前はエクシース次元、世界の名前は遊戯王ARC-V

窓際で蹲ってる少年の名前は「しらほし白星 ふうと風斗」……この少年には1つの秘密があった

彼には現実：いわゆるOCG次元とでも言うべき世界の知識、そしてそこで22年生き続けた、名を忘れた男の記憶を持っているという秘密があった

僕は現状にひどく困惑していた。何故こういう状況になったのかさっぱり分からない。だから記憶を遡って思い出そうとした

……確か僕は仕事の帰りだったはずだ。いつも通り上司に頭を下げて、タイムカードを押して、電車で揺られながらスマホゲーをしていて、最後に止めていた自転車で…

そうだ自転車。確か、信号が赤になりそうだったけどいけるとタカを括って突っ走ったところ、横からバスが右折してきたんだ。ならば

その時に事故で僕は死んで、この世界にやってきたとでもいうのか？
さながら今流行りの転生ものみたいに

…いやちよつと待て、記憶に続きがある

バスに轢かれそうになったものの、死にたくない一心で自転車を漕ぎまくった結果、轢かれることだけは避けたのだ。ただ自転車を車体にかすめたため僕はバランスを崩し、そのままガードレールにぶつかってふっ飛ばされる。そして飛んだ先に何故かあったゴミ箱に頭から突っ込んで…

そしたらここにいた

「どういうことだよッ!!」

起承転結の転が抜けている流れに叫ばずにはいられなかった。だってどう考えても流れがおかしいじゃん!!死んで転生じゃなくてゴミ箱に突っ込んだら転生ってどういうことなの!!?おかしいですよカテジナさん!!

「これは…：転生なのか？いやトリップ？でも体変わってるからなー、じゃあ憑依？…うわっスゲエ若え」

鏡を見ながら自分の変わった肉体を触る。見た感じ中学1年といったところか、こんな体のどこから岩を持ち上げたりするパワーが出てくるのだろうか。やっぱデュエリストって頭おかしい…

「ってそっか…：そーいや遊戯王の世界だったな…：しかもARCV」

そこまで考えて、今の詰みっぷりに軽く絶望する。なぜ僕がこの世界に来たのだとか正直早く元の世界に帰りたいとか、そんなことがどうでもよくなる程マズい状況なのだ

ARCVの世界は簡単に言えばスタンダード、融合、シンクロ、エクシーズと4つの次元に分かれている。その4つの次元を統合するために侵略戦争を起こした融合次元を止めるために、スタンダードにいる主人公「榊遊矢」が仲間たちとともに戦っていくという物語である

そして物語が始まる頃にはすでに融合次元はある次元に侵攻を開

始しているのだが、その次元というのがここエクシード次元である

つまり、僕がエクシード次元への侵攻から始まった、のちに次元戦争と呼ばれる戦いにどんな形であれ巻き込まれることはもはや確定事項ということである。1番平和なスタンダードが良かったです(震え声)

「どうしたものか…」

今からでもどこか遠くに逃げるか?地理もわからないし次元全体を襲撃されるから意味なし

ならいずれ結成するであろうレジスタンスに入る?そうならば次元戦争の参加は避けられないため同じく却下

最後の手段として個人でアカデミア兵を襲撃してデュエルディスクを奪う?敵は3人1組編成だからデュエルに時間がかかりそうだし増援が来られたら逃げられないが、ほぼ誰にも気づかれず逃げられるためハイリスクハイリターンといったところ…とりあえず保留

(問題が山積みだなあ……)

「…そういえばどんなデツキを使っているんだ?」

今後の予定を考えれば、デュエルが強くなければ生き残れない。だから机の上にあったデツキケースの中身を確認した

ふむ、三色の「ガジェット」に「血の代償」…ものすごく典型的な「代償ガジェット」だった。でもエクシードモンスターは「ガガギゴ」や「スキル・ゲイナー」みたいな、なんとも微妙なモンスターばかりか。これではパワー不足で押し切られるだろう

「仕方ないだろ、おれの小遣いじゃ高いエクシードなんて買えないんだから………ん、え」

喋ったつもりのない口に手を当てる。今、僕が喋ったのか?しかも「僕」じゃなくて「おれ」って

…もしかしたらこの体の元々の人格は残っているのか?それが無意識に喋ったと?

「別に闇マリクじゃあるまいし、体に乗っ取るつもりなんておれにはないんだけどなあ…てまた」

これは面倒だ。誰かと会話している時に出てきたらより面倒だ。

というかややこしい

かと言って元の人格を演じるのも難しい。知らないことの方が多いし、演じれたとしても簡単にボロが出そうだし

ピンポーン

そんな時、この家のチャイムが鳴った

「誰だ？」

窓から見えないように確認するが玄関らしきものはない。どうやらこことは違う方向のようだ

ピンポーン

またチャイムが鳴る。正直出るメリツトがない。これからのことのためにデツキを作る必要もあるし、だから居留守でも決め込もうとして、直後さつきよりも短い間隔でチャイムが鳴る

ピンポーン

「…かハッキリ言うともんどくさい。今憑依してる少年の個人情報、名前とかも分からない以上、むやみやたらに人と接触す『ガチャリ』ることは避けて

「…ガチャリ？」

ふと耳に聞こえてきたのは……その、信じがたいことにカギを開けるような音だったんだが…

もしかしてドロボウか？不安に思った僕はそくつと部屋のドアを開けて階段下の覗き込むと

「あ、やっぱり居やがったな！大会開始まであと10分だぞ！何やってんだよ風斗!!」

「お、お邪魔します…」

濃いオレンジに黄色が混じったツンツンヘアーの少年とピンクと薄い紫のショートヘアで髪飾りを付けているメガネの少女がそこにいた

アニメで見たことがある。この2人は終盤で出てきたレジスタンスのメンバーの2人

神月アレンと笹山サヤカの2人だった

第2話

「神月アレンと…笹山サヤカ…」

目の前で動く人物を見て僕は硬直する

ハートランドにデュエルディスク、しまいには変わり果てた自分の体(明確には違うが)。明らかに現実とは違う景色に、それでも僕は心のどこかで「ドツキリなのは？」と疑っていたのかもしれない

だが目の前で動く2人のキャラクター^{人物}の存在がその考えを粉碎した

信じられるワケがない。信じたくない。ああでも、ここはもう…:

(僕の知っている世界じゃないんだなあ)

「オ、オイ?どうしたんだよ風斗」

「どうして泣いているの…?」

思案に浸っていると下から見上げていた2人が困惑したように言う。僕は泣いていたのか?泣いたことなんて両手で数える程度しかなかったんだがな…思ってたより僕はあの世界が恋しかったみたいだ

「いや、大丈夫。寝起きでな、まだ眠気が抜けてないだけだ」

指で涙を拭きながら心配はいらないとそう伝えるが、2人はよりワケが分からないといった顔をしていた。解せぬ

「…お前、本当にどうしたんだよ?そんなに喋ったりする奴じゃなかっただろ?いつも部屋で1人であるのが好きだって言ってたじゃねえか」

(なるほど、この体の持ち主はヒッキーだったってことか。いや、大会に出たりするところから考えるに1人であるのが好きなのか。少し親近感がわくな)

好都合だ。もし性格や一人称のことを指摘されても「このままじゃダメだと思ったから」である程度誤魔化すことができる

それにこの体の名前も知ることができた。『ふうと』…『ふうと』か。それが今の僕の名前なんだな。さすがに僕の本当の名前を…:…な、まえ…:

「……う……ッ……!?!」

「…風斗?」

なんでだ?いくら記憶の中身を漁ってみても名前が思い出せない…思い出せない!!僕の名前が思い出せない!!なんで!

「オイ!大丈夫なのかよ!?!」

その時、アレンがこちらに近づいて肩を揺すって聞いてくる。その行動は僕の動揺を少なからず和らげてくれた

「っ…問題ない。心配かけてゴメン」

「お前本当に変じやないか?急に変わりすぎだろ」

「色々考えたんだよ、このままじゃダメだって」

「んにしたってよお」

「ねえ、2人とも」

アレンと話し合っていると、サヤカが玄関に飾ってあるアンティークな時計を見ながら言う

「早くしないと大会が始まってしまいうけど…」

「うわっそうだった!早く行かねーと、ってなんで部屋に戻ってんだよ!?!」

「忘れ物をな」

部屋に踵を返す僕を見てアレンが叫ぶが気にしない。部屋に入つて机の前に立ち、デツキケースをズボンの横に引っ掛けるようにセツトする

最後にデュエルディスクを左腕につけてアレンたちの元に戻る

“ふうと”の物と思う靴を履きながら、すでに玄関前に出てるアレンに聞く

「ゴメン、道忘れたから教えてくれ」

「ハア!?…ったくよお!ほらかギ!」

ヒュツとアレンがカギを投げ渡してくる。それが家のカギだとなぜか頭の中で理解できた僕はガチャリとカギを締める

その際に扉の横にある表札が目映った。そこには「白^{SHIRAHOSHI}星」と彫られていた

(しろ…いや、白^{しろほし}星ね。 “しらほし ふうと”…か)

「笑つちやダメよアレン！」

急に「おれ」と言っていた人が「僕」と言えば確かに違和感を感じるだろう。でもアレンは明らかに笑い過ぎだ。許さん

軽く人差し指でデコを弾いてやる。ビシツとな

「イテツ！」

「それじゃサヤカ、頑張つてな」

「うん。ありがとう！」

アニメで見たような内気な感じがない、花のような笑顔を見せてから手を振りながら彼女は受付に向かった。かわいい

「そういや、なんで家のカギを持ってたんだ？」

「なんか今日は色々聞いてくん。カギは風斗が隠し場所教えたんだろ。毎日起こしに行く俺の身にもなれよな」

「どうやら『ふうと』は無用心でもあったらしい。なんで家にいる時も外にカギ置いているのか」

そしてアレンは幼馴染属性だったようだ…男だけど。どうせなら可愛い女の子が良かった。具体的にはサヤカとか

—————

今日は幼馴染の様子がおかしい。あまり気に留めなかったサヤカとは違い、アレンはそう思っていた

「俺も聞きたいんだが、なんでそんなこと聞くんだ？」

「うーん…」

顎に手を当てて考え込む風斗を見て、アレンは寂しさのような無力を感じた。幼馴染が急に大人になったような…そんな、置いていかれたような気持ちを自覚した

（一体お前に、何があつたんだよ…？）

アレンの知っている風斗は深く考えたりしない、良くも悪くも正直な子供なのだから

「あ…実は今朝階段から転び落ちて頭打つてな、少し記憶が混乱してるんだよ」

「…なんで黙ってたんだよ」

「あの場で言ったらややこしくなりそうだからな」

嘘だとすぐにわかった。アイト斗はそんな気を回したりする奴ではない。宿題とかデュエルとか、困ったことがあったら俺の家に駆け込んでまで助けを求める奴だ。ましてや階段から転び落ちたのにそれを隠そうとするなんてありえない

「お前、頭打って別人になったとかじゃないよな」

カラカラ笑って自分の感情をごまかす。そして、そんなジョークを言った。自分でも認めたくないようなとびつきり悪趣味なジョークを

(頭を打って中身が変わるとか、漫画やアニメじゃあるまいし…風斗なら「んなワケあるかっ!!」って言うに違いない)

そう切望して、アレンは中学生にしては高めな背丈の幼馴染を見上げる

「…アレン」

だけど

「実はこの体の中身が」

悲しそうに

「…しらほし ふうと…じゃ」

罪悪感に潰されそうな眼で

「なかつたら」

風斗
お前の顔で、その続きを

「言う「ってんなワケあるかっ!!」…!!」

「言うな!!」と、否定の言葉を吐き出そうとした時、風斗は大声で否定した。それもアレンがいつも聞いている幼馴染の雰囲気です

それを聞いたアレンは呆気を取られたあと、プルプル震えてから風斗の背中を叩く

「そりやそうだ！冗談抜きで驚いただろお前!!」ばんばん

「イター…ちよ、アレ、痛い痛い!!」

涙目で痛みに堪える風斗を見てアレンはホッとした

「ほらっ、早くサヤカの応援に行こうぜ」

背中をさすりながらついてくる風斗を見る。そこにはいつもの風斗の姿がある

何があつたかは分からない。でも確かにコイツは風斗だ。なら、コイツに何があつても、どう変わろうとも俺は風斗の味方だ

後ろめたい気持ちにフタをしながら、アレンは風斗と観客席の方へ向かっていった

こちらを見ながらハルトの前に立つ

「…すまん。そんなつもりはなかったのだが怖がらせてしまった」

とりあえずカイトに謝罪を入れる。幾分か視線は和らいだ気がする

次にしゃがみ込んでハルトに視線を合わせて謝る

「怖がらせてゴメンな。僕の名前は白星ふうと、キミは？」

「あの…その…：…ハ、ハルト…ト…」

「よろしくハルト。アメちゃん食べる？」

ただたどしくも自己紹介をしてくれたハルトになぜかポケットに入ってたパイナップルをあげる

「あっ…ありがとう…」

ハルトは少しビクビクしながらも飴を受け取ると、申し訳なさそうにカイトを見上げた。ああ、知らない人からもらったものだから食べたら怒られるかもって思ってるのか

しゃがみ姿勢から立ち上がるとカイトと目が合う。そして微妙な沈黙が流れた。気まずい

「え…つと…：…初めまして？僕の名前は」

「白星風斗だろう、アレンから話は聞いている。俺の名前は天城カイト、こっちは弟のハルトだ。…先程は失礼な態度をとってすまなかった」

そう言ってカイトは軽く会釈をする

「いや、アレは僕が悪い。どことなく雰囲気似ていたからつい、な」

明らかに自分の方に非があるので謝罪し返す

「俺のことを知らないとは珍しいな。これでもクローバー校では有名な方だと自負してはいるが」

「知ってることは知ってるつもりだ。」ギャラクシーアイズ・サイファー・ドラゴン「銀河眼の光波竜」が切り札なことかな

「なるほど」

こういう時はアニメ知識というものが役に立つ。だがあまりに色々喋りすぎるとなぜ知っているのだと自分の首を絞めることになるから、そういうのは必要最小限にしないとな

サヤカか。もう1人は……………ッ!!)

サヤカの対戦相手を見た時、僕はたいそう驚いた顔をしていただろう。なぜなら、サヤカの対戦相手の名前が「黒咲 瑠璃」だったのだ。ふとデュエルコートを挟んで向こう側の観客席に目を向けた。そこにはレジスタンスとして戦い続けたデュエリスト、「ユート」と「黒咲 隼」がいた。おそらく瑠璃の応援に来たのだろう。

彼女はアカデミアが画策する計画の要といえる重要人物。瑠璃が拐われれば、アカデミアの計画はストーリー通り順調に進むことだろう。

(まあ、僕には関係のない話だが)

ハツキシ言って瑠璃を助けてもメリットなど微塵もない。むしろ瑠璃を拉致する(予定の)ユーリを撃退したとなればユートや黒咲と知らない接点ができて面倒くさいことになってしまっただろう。

一言くらい話してみたい気持ちはあるが、そうなればレジスタンスに入ってしまった時しかチャンスはないだろう。クローバー生である僕が他校の知らない人に話しかけるなど不自然極まりない。

あ、でもサヤカは瑠璃と友達なんだっけ…?でもそんな回りくどいこととしてまで話したいワケではないし別にいいか

「アレン、お前が話していた通りのヤツとは思えんほど印象が違うな」
「……実は俺も混乱してんだよ。今朝から中身がまるで違う人みたい
に変わっちまってよ」

「…どういうことだ?」

「実はな…」

そろそろ試合が始まるみたいだな。この世界のデュエルがアニメと同じ感じなのかりアル寄りなのか

フフフフ：見せてもらおうか。アニメ次元のデュエリストの実力とやらを！

第4話

サヤカと瑠璃のデュエル、それはサヤカから始まって6ターン目に終わりを迎えた

「フエアリー・チア・ガール」で攻撃!!」

サヤカが操るエクシーズモンスター。チアガールのような格好の妖精「フエアリー・チア・ガール」が攻撃をする。瑠璃の切り札である腕が翼になっている鳥人「リリカル・ルススキニアL」―アセンブリー・ナイチンゲール」に命中し、瑠璃のライフを削りきった

「ぎゃああああ!!」

ソリッドビジョンの衝撃が瑠璃を襲うが、食らったのは攻撃の余波だったためケガなどはせずに済んだ。そのままペタリと座り込む瑠璃

《WINNER!! SAYAKA!!》

『勝者! クローバー校1年、笹山サヤカ!!』

ワアアアアアア!!!

デュエルの決着に観客たちは歓声と拍手で建物内を埋め尽くした

「おっしやあ! サヤカの勝ちだ!!」

「瑠璃もなかなか接戦はしていたけどな。……やっぱり火力不足なところがあるか」

「だよなあ。もっと攻撃力の上がる装備魔法とか入れとけば低い攻撃力を補えるからな」

サヤカの勝利を喜びながらもアレンは瑠璃のデッキの弱点を口にするが、僕がこぼした火力不足という言葉は瑠璃一人ではなくこの世界全体に向けての言葉だった

(エクシーズモンスターは出しやすい代わりに全体的にステータスが低い。それを補うエクシーズ素材を使った効果は凄まじい効果を持つ奴もいる…が、微妙だったり限定的だったり挙げ句の果てに使えるい効果だったりが大半以上だ。しかも中にはエクシーズ素材にカテゴリや種族指定のモンスターもいるから、汎用性が高く強いカードなんかごく一部しかない。それこそ前の世界じゃ相手の使うカードを

特定できる程度には)

だけど油断はできない。あくまでそれは汎用性を突き詰めた結果だ。「ヴェルズ・オピオン」や「バハムート・シャーク」からの「餅カエル」のコンボなど、カテゴリー・種族統一に入るエクシーズにだって強力な奴はたくさんある

「…うん？」

そんな考え事をしてしていると、デュエルを終えたハズのサヤカと瑠璃が話し合っていた。あれは…サヤカが瑠璃にカードを渡している？

(もしかして今、あのシーンなのか?)

それはアニメ終盤の回想で出てきた話のことである。デュエルを終えた瑠璃がサヤカからフェイバリットカード「リトル・フェアリー」を受け取ったのだが、黒咲隼がその馴れ合いを許さず瑠璃の持った「リトル・フェアリー」のカードをはたき落とすといったことが語られたのだ

正直本編にはほぼ関係ない小話といったところなのだが、そこで1つの欲求が浮かぶ

(今のタイミングなら、ストーリーに関与せずに主要キャラと話したりできるんじゃないか?)

何事もなく元の世界に帰りたいたいと思う一方、できるなら主要人物と話したりデュエルしたりできたらと思ったりもするのだ。なにせ元の世界に戻ればこんな機会は絶対来ないのだ。来ても困るが

でも下手に主人公たちに関わって元の世界への手がかりとかが得られなかつたら意味がない。一刻も早く帰りたくもある、だからこそ諦めてスタンダード次元に逃げて一般人に成りすまそうと考えていたのだが…

(だとしたらチャンスは今しかない!)

「オイ!?どこ行くんだよ風斗!」

アレンが何か言ってるが聞いているヒマはない

“思い立ったが吉日”の言葉通り、僕は急いでデュエルコートに向かうために観客席を後にした

「瑠璃、もらうんじゃない」

「兄さん！」

「リトル・フェアリー」を受け取ろうとする瑠璃に対して、デュエルコートに下りてきた黒咲はそう言う

デュエリストにとって大切な自分のカードを他人にやすやすと渡そうとするサヤカの行動を理解できない黒咲は、瑠璃に近づいてカードをはたき落とそうと手を振るい

ガシッ

「人のカードをはたき落とそうとは、穏やかじゃないな」

「ッ!？」

横から伸びた手が腕を掴んで止めた

「誰だ!？」

「なに、ただのサヤカの知り合いだ」

「風斗、どうしてここに!？」

伸びた手の正体は僕のものだ。手を振り払おうと黒咲が腕を動かすのでこっちもパツと手を離す

「下がってろ」

「え?？」

瑠璃をかばうように黒崎の前に立つ。瑠璃は困惑しながらもサヤカの方へ下がっていった

「なんのつもりだ?？」

「いや、正直僕も関わる気はあんまなかった」

小馬鹿にするようにため息をつけてから、強く睨みつける

「でも…カードをはたき落とそうとしたな。僕はカードを大切にしないヤツは許せない質タチなんでね」

「彼女はその大切なカードを気安く瑠璃に渡そうとした。己の魂といえるカードを渡すなど、デュエリストとして許されることでない」

デュエリストとしての誇りが高い黒咲らしい弁論だった

「だとしてもそれを他の人間に押し付けていいワケにはならない。たとえ相手が肉親でもな」

「…なにが言いたい」

「言わなくてもわかるだろう」

左腕にデュエルディスクを装着する様を見せつける。つけたのは今が初めてだが、まるで何年も扱ってるかのように体は自然と動いた「意見の押し付け合いはコイツの専売特許だろ？」

「デュエルでこの俺を黙らせる気か…いいだろう」

どうやら向こうも乗り気らしい。先ほど瑠璃が立っていた場所に立ってデュエルディスクを構える

こちらも距離をとって対面するように立ち、デュエルディスクから赤いプレートを出現させる

サヤカたちも移動を終えたらしい。観客席を見るとアレンとカイトがいる場所にサヤカと瑠璃、そしてユートも一緒に来ていた

「さてと、やれるだけやってみるか」

デツキは宿主さまの「代償ガジェ」、エクストラの中身は貧相、しかもこの世界で初のデュエルで相手はアニメでも屈指の実力者だ

全力を尽くそう

「デュエル！」

「デュエル」

白星 風斗 LP4000 手札5枚

VS

黒咲 隼 LP4000 手札5枚

「先行はお前からだ」

「そうか。僕のターン、スタンバイ、メイン」

アニメじゃほとんど明言されることがないフェイズ宣言をしながら手札を見る

「グリーン・ガジェット」「レッド・ガジェット」「血の代償」と「マ

シンナーズ・フォートレス」が2枚か：「グリーン・ガジェット」を召喚してサーチした「レッド・ガジェット」を使って「フォートレス」を出しとくのが無難か)

「まず僕は「グリーン・ガジェット」を召喚」

手札の「グリーン・ガジェット」を赤いデュエルディスクの真ん中に置く。すると光と共に姿を現したのは、緑色の大きな歯車に手足がちよこんと生えたモンスターだった

「おお、これが…」

初めて自分で召喚したモンスターに感動を隠せない。出したのは素材程度にしか使わないモンスターだが、今の僕にはキラキラに輝いているように見えた。グリーンなのにゴールドやシルバーに見えるよ

「何を惚^{ほう}けている。早くターンを進めろ」

「あ……悪い」

デュエル中に遅延とも言える行為をしたこっちに非があるため、素直に謝った

「じゃあ仕切り直して、召喚に成功した「グリーン・ガジェット」の効果。 「レッド・ガジェット」をサーチする」

デッキから飛び出した1枚を手取る。それは「レッド・ガジェット」。デュエルディスクって便利だなと思いつつながら僕はそれを黒咲に見せる

「そして手札の「マシンナーズ・フォートレス」の効果。合計レベル8以上の機械族を手札から墓地に送ることで手札・墓地からこのカードを特殊召喚できる。さつき手札に加えた「レッド・ガジェット」と「フォートレス」自身を墓地に送り、「フォートレス」を墓地から特殊召喚」

2枚のカードが墓地に送られる演出が出ると、そこから轟音と共に巨大な戦車型マシンが出てくる。戦車とは思えぬ威圧感。『要塞』の名に相応しい

「1枚伏せてターンエンド」

白星 風斗 LP4000 手札2枚

グリーン・ガジェット

レベル4 ATK1400

マシンナーズ・フォートレス

レベル7 ATK2500

伏せカード 1枚

VS

黒咲 隼 LP4000 手札5枚

「攻撃力2500の上級モンスターを出してきたか。だがその程度の実力で俺を倒せるなどと思うな！」

凄まじい気迫を発しながら黒咲はカードをドロウした。デュエルは始まったばかりだ

第5話

白星 風斗 LP4000 手札2枚

グリーン・ガジェット

レベル4 ATK1400

マシンナーズ・フォートレス

レベル7 ATK2500

伏せカード 1枚

VS

黒咲 隼 LP4000 手札5枚

「俺のターン、ドロー！」

黒咲の方を見ながら考える。「マシンナーズ・フォートレス」の攻撃力は2500、しかし特殊召喚したモンスターだ。つまり黒咲のデッキカテゴリである「R」レイドラフターズ「R」エクシーズモンスターに多い、特殊召喚モンスターに対して発動する効果が使えろということだ

「俺は「RRーバニシング・レイニアス」を召喚！」

黒咲が最初に召喚したのは展開のためのモンスター。脚部が輪っか状になっている濃緑の鳥が現れる

：しかしこうして実際にソリッドビジョンで見ていると、鳥獣族じゃなく機械族の間違いだろと思ってしまう見た目だな「RR」モンスターは

「バニシング・レイニアス」は召喚に成功した時、手札の「RR」1体を特殊召喚できる。俺は手札の「トリビュート・レイニアス」を特殊召喚！」

甲高い声を上げて「トリビュート・レイニアス」が姿を現す

「トリビュート・レイニアス」は召喚・特殊召喚に成功した時、デッキの「RR」カード1枚を墓地に送る。デッキの「RRーミミクリー・レイニアス」を墓地に。そして「ミミクリー・レイニアス」は墓地に送られたターン、墓地のこのカードをゲームから除外することで「RR」カードを手札に加えることができる。俺は「RRーレイニネス」を

手札に加える！」

デッキから1枚のカードを手札に加えると、次に別のカードをデュエルディスクにセットする

「俺は永続魔法「RRーネスト」を発動！このカードは自分フィールドに「RR」モンスターが2体以上いる時、デッキ・墓地の「RR」モンスター1枚を手札に加えることができる。効果でデッキから「ファジー・レイニアス」を手札に加える。そして「ファジー・レイニアス」は1ターンに1度、自分のフィールドに「ファジー・レイニアス」以外の「RR」モンスターがいる時、手札のこのモンスターを特殊召喚できる！守備表示で特殊召喚！」

ぐるぐる回り、さらにモンスターを特殊召喚する黒咲。さて、守備を固めるか？それとも攻めるか？

(レベル4のモンスターが3体…来るぞ、遊馬!!)

「俺はレベル4の「バニシング・レイニアス」「トリビュート・レイニアス」「ファジー・レイニアス」の3体でオーバーレイ!!」

ふざけたことを考えてる間に3体のモンスターが闇色の球体に変化する。そしえ僕と黒咲の間に現れた宇宙のような渦に飲み込まれていく

「雌伏のハヤブサよ。逆境の中で研ぎ澄まされし爪を挙げ、反逆の翼っ翻せ!!!」

さながらビッグバンのような爆発が起こり

「現れるオ!!ランクツ4!!「RRーライズ・ファルコン」!!!」

6枚の大きな翼を翻す黒いハヤブサが姿を見せた

RRーライズ・ファルコン

ランク4 ATK100

ここで「ライズ・ファルコン」を出してくるか。黒咲の初手を考えればサーチ効果を持った「フォース・ストリクス」2体を並べることだって可能だった。でも防御を固めてこないということとは

(こっちのリソースを削る気か)

「ライズ・ファルコン」のモンスター効果！オーバーレイユニットを1つ使うことで、ターンの終わりまで相手フィールドの特殊召喚され

たモンスター全ての攻撃力を「ライズ・ファルコン」の攻撃力に加える！」

隼の周りで衛星のように動く3つの光の玉。そのうちの1つが弾けると「ライズ・ファルコン」の体が炎を包まれた

ATK100↓2600

しかし不可解だ。これでは与えられるダメージはたかだか100、こつちがもつと特殊召喚したモンスターを出してからの方がダメージを多い。下手すればライフを全部消し飛ばすことだってできるのに

それに「フォートレス」は戦闘破壊されればフィールド上のカードを1枚破壊できる効果もある。だというのに「ライズ・ファルコン」を出してきたということは効果を知らないってことなのか？アニメの世界じゃ効果を知らず驚くことはよくあることだし十分ありえるか「さらにオーバレイユニットとして墓地に送られた「ファジー・レイニアス」の効果で、デッキから同名カード1枚を手札に加える。バトルだ！「ライズ・ファルコン」で「マシンナーズ・フォートレス」を攻撃！」

「ライズ・ファルコン」が天井ギリギリまで上昇する。そしてそのまま勢いよく急降下し、炎を纏った脚の爪で「マシンナーズ・フォートレス」を切り裂く

「ブレイブクロー・レボリューション!!!」

ズパアンツ!!

爪による破壊痕が機体に刻まれる。青白い電気をバチバチ散らしながら「マシンナーズ・フォートレス」は破壊された

白星 風斗 LP3900 手札2枚

しかし飛び散った機体のパーツが散弾銃の弾のように「ライズ・ファルコン」に殺到し、パーツが直撃すると「ライズ・ファルコン」も「フォートレス」と同じ末路を辿った

「クツ…」

「フォートレス」は戦闘破壊されたらフィールドのカード1枚を破壊する。対象は「ライズ・ファルコン」

結局、何がしたかったのかさっぱりだよ

「俺がそのモンスターの効果を知らないと思っていたのか?」「ライズ・ファルコン」が破壊された時、手札から速攻魔法「RUM^{ランクアップマジック}」を起動!」

「?」

だが黒咲の目には「ライズ・ファルコン」が破壊された驚愕などなかった。破壊と同時に発動してきた「RUM」がなんなのか思い出せずにいると黒咲はエクストラデッキからカードを取り出す

「このカードは俺の「RR」エクシーズモンスターが破壊され墓地に送られたターン、破壊されたモンスターを特殊召喚する。そしてそのモンスターよりランクが1つ上の「RR」エクシーズモンスターにランクアップさせる!!」

「……ああ、あつたなあそんなカードが」

黒咲の説明で使用されたカードの中身を思い出す

つまり黒咲は僕が「ライズ・ファルコン」を効果破壊するところも読んだ上で「フォートレス」を処理しに来たのか

(てことはここで「ブレイズ・ファルコン」が飛んでくるといいうわけかな。少なくとも僕なら出す)

そんなことを考えてるうちに、黒咲の場に復活した黒い隼が紫の流動する球体が変わっていく

「凜猛なるハヤブサよ。激戦を切り抜けしその翼翻し、寄せ来る敵を打ち破れ!」

燃え盛る火炎を纏った鳥のようなシルエット

「ランクアップ・エクシーズ・チェンジ!」

ボシユウウ!

「現れる、ランク5!」「RRブレイズ・ファルコン」!!!」

熱風とともに目覚ましいまでに赤い体のハヤブサが雄叫びの声をあげた

RRブレイズ・ファルコン

ランク5 ATK1000

「ブレイズ・ファルコン」はオーバーレイユニットを持つ時、相手プ

レイヤーにダイレクトアタックをすることができる！」

「ブレイズ・ファルコン」は宙に浮いた体を動かして僕の真上に移動し
「迅雷のラプターズ・ブレイク」!!!

「うっ!？」

まさかの電撃を落としてきた。身構えていたとはいえ想像以上の
攻撃に思わず叫び声が漏れてしまった

白星 風斗 LP2900 手札2枚

「風斗!!？」

軽く横を向くとアレンが焦燥に満ちた顔で今にも観客席から入っ
てきそうなほど柵を乗り越出してこつちを見ていた

「痛い、い、痛…ッ痺れ過ぎて逆に痛い…:1000ダメでこれって
…」

「随分と想定が甘い奴のようだな。だがまだこんなものではない!
「ブレイズ・ファルコン」は戦闘ダメージを与えた時、相手フィールド
のモンスターを1体破壊する！」

「あ、ヤバッ」

前を向くもすでに遅し。「ブレイズ・ファルコン」の赤い羽根がファ
○ネルのように飛び交うと、そこから発射したレーザーの嵐に貫かれ
て「グリーン・ガジェット」は爆散した。グ、「グリーン・ガジェッ
ト」オオー!!!

「俺はカードを1枚伏せてターンエンドだ」

白星 風斗 LP2900 手札2枚

伏せカード 1枚

VS

黒咲 隼 LP4000 手札2枚

RRーブレイズ・ファルコン

ランク5 ATK1000

ORU 1

RRーネスト

伏せカード 1枚

「絶対アレ「レディネス」だよな…ドロロー。スタンバイ、何もなければ
メインフェイズ」

引いたカードは「マシンナーズ・ギアフレーム」。デッキには3枚目の
「フォートレス」の他に「カノン」もあつたハズ

「マシンナーズ・ギアフレーム」を召喚、召喚時効果でデッキから「ギ
アフレーム」以外の「マシンナーズ」モンスター1枚を手札に加える
ことができる。…「マシンナーズ・カノン」を手札に」

オレンジ色のシユツとしたフォルムのロボットが出てくる。4秒
ほど硬直してから、ヘルメットのようなものを被った顔の1つ目が光
を投射して「マシンナーズ・カノン」のカードを映し出す。僕がデッ
キのカードを確認していたゆえの硬直だった

それを確認すると僕はデッキからサーチしたカードを人差し指と
中指の間に挟み、すぐに墓地に送ってから墓地の「フォートレス」を
取って黒咲に見せる

「墓地の「マシンナーズ・フォートレス」の効果、手札のレベル8「マ
シンナーズ・カノン」を捨て自身を蘇生させる」

巨大な砲塔を背負った「カノン」は一瞬フィールドに出てきたかと思
うと「えっ!?オレの出番これだけ!?!」と言わんばかりに振り向いて
から霧散していった。そして謎の罪悪感を感じてる間に入れ替わる
形で「フォートレス」が登場する

「ここで永続罫「血の代償」を発動。ライフを500払うことで通常召
喚できるようになる。500払い「レッド・ガジェット」を召喚」

フィールドに「グリーン・ガジェット」に似た赤いモンスターが出
てくる

白星 風斗 LP2400 手札1枚

「レッド・ガジェット」の召喚時効果、デッキの「イエロー・ガジェッ
ト」を手札に加える。そしてもう1度500ポイント払い「イエロー・
ガジェット」を召喚」

「イエロー・ガジェット」が出現する。見た目は簡単に察することがで
きるだろう

白星 風斗 LP1900 手札1枚

「イエロー・ガジェット」も他の「ガジェット」と同様の効果を持っている。召喚時効果で「グリーン・ガジェット」を手札に……そして2体の「ガジェット」と「ギアフレーム」を重ねる」

「……」

正直、コイツは今使うべきではない。しかし使わなければ反撃もできずやられる

「スキルゲイナー」をエクシーズ召喚」

「ガジェット」2体と「ギアフレーム」が重なり、雷が落ちる。そして雷の落下位置には、2本の刀を持ち、白い仮面と赤いマフラーのようなものが特徴のモンスター「スキル・ゲイナー」だった

隻眼のスキル・ゲイナー

ランク4 ATK2500

「白星 ふうと」の切り札といえる「隻眼のスキル・ゲイナー」。端的に言えばエクシーズモンスターの能力をコピーできる効果を持つ。ゆえにエクシーズ召喚が主流のエクシーズ次元ではそれなりの強さを発揮できると言える

でも「RR」の瞬間火力を利用するなら、このカードは確実にトドメを刺せるタイミングで使うべきなのだ。それもバレれば絶対警戒してくるから初見で出す必要もある

しかしそれができなかった。慣れないデッキ、パワーカードの差と言えばそれまでだが、それ以前に黒咲は堅実なデュエルをしていた。普段と違って守備表示で出したりすれば良かったかもしれない。性格上無理だと思うが

「隻眼のスキル・ゲイナー」のモンスター効果。エクシーズ素材を1つ使い、相手のエクシーズモンスター1体を対象に発動。「スキル・ゲイナー」は対象のモンスターの同名カードとして扱い、効果をコピーする」

「エクシーズモンスターをコピーする効果だ?!」

「ブレイズ・ファルコン」から薄い影が出てきて、その影と重なった「スキル・ゲイナー」は赤いオーラを纏い出した

「スキル・ゲイナー」の効果。エクシーズ素材を使い「ブレイズ・ファルコン」の『特殊召喚した相手モンスター全てを破壊し、破壊した数×500のダメージを相手に与える』効果を使わせてもらう」

赤いオーラで光る二振りの刀を振るい、横一線の斬撃を飛ばす。黒咲のモンスターゾーン全体を斬りつけた一撃は「ブレイズ・ファルコン」を真っ二つにして破壊した

「ブレイズ・ファルコン」……！」

黒咲 隼 LP3500 手札2枚

僕の場合には2500のモンスター2体、黒咲の場は空。これで黒咲は「レディネス」を使わざるを得なくなった

「バトルフェイズ、「フォートレス」「スキル・ゲイナー」でダイレクトアタック」

「させん！^{トラップ} 罠発動、「RRレディネス」!!このターン「RR」モンスターは戦闘で破壊されなくなる効果ゆえに今は意味がない……だが、このカードは墓地にある時に除外することで、さらに戦闘・効果によるダメージをターンの終わりまで0にする！」

「フォートレス」の砲撃、「スキル・ゲイナー」の斬撃はバリアみたいなものに阻まれてしまう

これで「レディネス」を使わせることができた。が、「スキル・ゲイナー」を先に出した時点でこっちの勝機は0に等しい

「……もういいだろう」
「？」

意外と接戦できて、久々に楽しいデュエルだった。でもこれ以上はもう無駄だ。だから……

「!? お前、何をッ」

「サレンダー」

僕はデッキトップに手を置いた

白星 風斗 LP1900 手札1枚

マシンナーズ・フォートレス

レベル7 ATK2500

隻眼のスキル・ゲイナー

ランク4 ATK2500

ORU 1

血の代償

VS

黒咲 隼 LP3500 手札2枚

RRーネスト

シユウウウ……

やることは終わった。消えていくソリッドビジョンに背を向けながらデュエルコートから退場するべく歩く

「待て!!」

「…何?」

「キサマどういうつもりだ!自らデュエルを仕掛けておいてサレンドーをするなど、この俺を侮辱しているのか!!」

振り向いて見た黒咲の顔はこちらを睨みつけていた。デュエリストとしてのプライドというやつだろうか……どうでもいい

「簡単な話だよ。あれ以上続けていても僕に勝機はないどころか確実に負けるって分かっていたからね」

「何を根拠に!」

「お前の「ファジー」じゃない方の手札、他の「RR」だろ?」

僕の考えを口にする黒咲はピクリと動きを止めた

「それか蘇生カードかな?そうじゃなかったとしても次のドロローで別の「RR」を呼べるカードを引く可能性は充分高い。あとは「ネスト」で墓地の「ライズ・ファルコン」をデッキに戻して再度エクシーズすればそれで終わり、普通に「エトランゼ・ファルコン」を出して自爆特攻してから「ブレイズ・ファルコン」を復活させればそれでも終了。あ、「ソウル・シェイブ」引くって勝ち筋もあるな」

そうしてスラスラとサレンダーの理由を口にする。これだけの根拠があるのだ、文句を言われる筋合いはあるまい

「まあそういうことだ。頭も冷えただろ?あとは兄妹2人で冷静に話

し合うことだね」

言うだけ言って、今度こそ僕はデュエルコートから退場した

第6話

「ただいま」

現在の自分の家の玄関で小さくそう呟く。しかしアレンの情報で今の白星家に僕ふうと以外の人はいないから、返事など返ってくるはずもなかった

タンタンと階段を上りすぐ近くの暗い自室に入る。荷物ごと体をベッドに預けながら、鬱陶しい夕焼けに目を細める

「…これからどうしようか…」

「どうしようか」とは当然、僕が元の世界に帰ることができるかどうかの不安の表れであった

意味の分からない経緯からこの体にひつ憑いて、幼馴染だというアニメのキャラクターに連れ回されて、衝動に任せてデュエルまでした。言葉にすればそれだけなのものすごく長い1日に感じた

「アレンとサヤカには何も言わず帰ってしまったな…明日はどうしようか…学校か？でも行き方が分からないから自分で行くことができないうし、最悪理由をつけて休むか…」

不安や予定を独り言で口にするると誰かに話した気分になる。そうするとなんだか気持ち少し楽になったので、ベッドの上で胡座をか

く
「きつと近い将来アカデミアがやってくる…1週間後か？1ヶ月後か？最悪明日…いや1分後かもしれない」

そう思うと不安が再び浮かび上がってきた

今の僕のデッキでは間違いなく勝てない。アカデミアの戦法は物理的にデュエリストの数が多い物量戦法だ。しかもトップ直属の精鋭であるオベリススクフォースは効果ダメージバーンが主体のデッキ構築。初期ライフが4000ではターンが回ってこない可能性もある

かと言ってデッキを持たないのは論外でしかない。たった1人が丸腰で軍隊レベルの数を相手に、知らない街で逃げ続けることなど不可能だ。自衛のデッキくらいは持たねば問答無用でカードにされるだろう

デッキの強化、いや変更が必要だと感じた僕は部屋の電気をつけ、中身をひっくり返す勢いでカードを探した

「何かないかなつと…」

命がかかっている。そのはずなのに鼻歌交じりにカードを探す僕はあまりに危機感がない。きつとまだどこかでこの世界が夢なのだとでも思ってるのだろうか

ある程度探すとカードケースがあった。それを開けて中のカードを選別する……が、中身は思いの外バラバラで統一感のない内容だった。思いの外というのは初期の通常モンスターから現在のなんとも言えないカードまで幅広い世代のカードが入っていたからだ。当然融合やシンクロ、ペンデュラムなどない。リンクなど以ての外

しかし「神の通告」や「魔法効果の矢」を見つけたのは大きかった。特に「魔法効果の矢」は対ペンデュラムにピッタリのカード。今後誰が敵になるか分からない以上あらゆる対策が必須だ

でも、やっぱりカードプールがイマイチでしかない。むしろこのカード群でよくあれだけ完成度の高い「代償ガジェ」を作ったものがある

「成果はこんだけか」

全くない訳ではないが現状を変えるほどではない。そもそもカードパワーが違い過ぎて扱いきれぬ感じがしない

きつとこの先、生き残れない。デュエルが全てと言える『遊戯王』の世界においてこのデッキが勝つことができない。知識どうこうの話ではないのだ。この世界のデタラメなカードや運を乗り越えるには、同じくデタラメな戦い方でやらなければならない。それこそ相手に文字通り何もさせないつもりで

でもそのためのカードがない。自分の力に自惚れることなんてできるわけがない。強いカードがないと誰にも勝てない。あつてもプレミだつてする。プレミしてもなお簡単に勝てるカードがなければ

ブルブル…

手が震える。僕の心の根底に隠していた恐怖がにじみ出たのか？…いや違う。きつとこれは「ふうと」の心だ。信じられない未来の真

実を知った恐怖への怯えだ

沈む気持ちを紛らわす為に部屋を見渡す

「……………あれ……………」

すると、違和感を感じた。この部屋は“白星ふうと”の物だ。ここにあるものは“ふうと”の物であって僕の所有物ではない。全てが未知でしかない

なのに……………今、『既視感』を感じた

「どこだ……………」

四つん這いで既視感の感じた方へ移動する。ところどころ方向を修正しながら壁を、クローゼットを、タンスを、机を見る

「こっちはじゃない、あっちも違う……………」

見つけたそれは、ベッドの下に隠されるように置いてあった。透明な持ち運びのできる2つのケース。厚紙で作られた3つの箱、高級肉を入れる用の小さい木箱。白と黒が2つずつのプラスチック製のデツキケース

「これ……………僕のカードだッ」

見間違えるはずもない。それらはずっと愛用していた僕の集めたカードの入ったカード入れだった

思わず手に取ったデツキケースには馴染みのある重みがあった

「ひよつとして！」

興奮しながらカードを取り出す。三重のスリーブに入ったそれには、レベルとランクと守備力がない青いカードが

「いけるかな？」

なんだか普段持ってたカードよりもずっと頑丈に見えたカードを持ち、デュエルディスクを起動して……………震える手でデュエルプレートに置いた

ブオオオオッ

『グオオオオオ!!』

駆動音と弾倉を回す音をかき消す大音量で、目の前に現れた部屋を埋め尽くすほどの巨体のドラゴンは咆哮した。肌触りの良さそうなメタリックなボディに思わず手を伸ばし、それが通り過ぎたところで

ソリッドビジョンだということをお願い出した

それでも僕はその金属の触感を想像しながら、実態のないボディを撫でた

僕にはそのモンスターが希望に見えた

足元の全てのカードが光り輝いてるようにすら錯覚した。それほどまでに僕は生き残ることに諦観の念を抱いていた

「いける…勝てるッ、これなら」

希望とやる気がムンムンわいてきた。理屈は知らないが、『僕の世界のカード』もこの世界に適用されているのなら、それはこの世界で唯一の僕の武器になる

そう考えると時間が足りない。アカデミアがいつ攻めてくるか分からない以上、色々な準備をする必要がある

「買いに行くか…」

「ふうと」には悪いことをするが、どうせエクシーズ次元の侵略は止められない。この家は…「思い出」や「帰る場所」は1度破壊される。なら腹をくくって覚悟を決めてもらおう

僕はありったけの有り金を持って外に出た

—————

「リュックOK。デッキOK。カードOK」

準備はしてきた

「デュエルディスクOK。非常食OK。財布もOK。換金用のカードもOK」

覚悟もしてきた

「ナイフもある。スタンガンもある」

目的はただ1つ。アカデミアもレオ・コーポレーションもレジスタンスも…：ズアークも出し抜いて、次元跳躍システムの大元を強奪し、元の世界に帰ること

「よし…帰るぞ。絶対！」

悲鳴と嘲笑と怒号が飛び交い、揺れる赤に染まっていくハートラン

ド

高台からその光景を見下ろしながら、僕はその決意を胸に抱いた

第7話

悲鳴を無視する。助けを呼ぶ声は無視する。胸糞の悪い光景を目に映さないように瓦礫の街を駆ける

平和なデュエルをしていた世界だけあつて、突如やってきた兵士と機械仕掛けの巨人達に為す術なく蹂躪されていく

ズズズズツ…!

「わっ!」

建物が崩れ落ち、目の前の道を塞ぐ。遅れて10の獣の顔を持つ巨人「古代の機械混沌巨人」アンティーク・ギア・カオス・ジャイアントがアカデミア兵士と共に現れたので、建物の陰に隠れる

「そつち、何人狩ったよ?」

「11人いったぜ」

「クソ、4人も足りねえぜ。まあいい。慣れていけば俺の方が勝つからな!」

「言つてろ!」

赤と黄色の軍服を来た子供が楽しげに言う

雰囲気だけなら学生の何気ない意地の張り合いだろう。だがその実態は、人間狩りに疑問を欠片も抱かない歪な洗脳兵と言ったところか

「クズが……」

だからと言つて聞いて気分のいいものではないし、洗脳だからと割り切れるほど大人にはなれない。そもそも原作でアカデミアから脱走する人間もいることから、一般的な情緒や倫理が育つ下地はあるという事だ。結局あいつらは弱いものいじめを悪い事だと認識しないクズ、ただそれだけの事だ

もつとも、全て理解した上でエクシース次元を見捨てて逃げる僕も、同じ穴のムジナでしかないのだが

とにかく、1番の目標は敵のデュエルディスクを手に入れること。それを確実に成す為にも、出来る限り孤立してる敵兵を狙うのが1番なのだが、やはり襲撃1日目では見かけた兵士全てが集団で行動して

いる。リスクを避ける以上、今は逃げ続けるのがベターか…ん？
(あれは…)

砲撃で壊れた道を走る子供がいた。後ろからはアカデミアの兵士達がニヤついた顔でゆっくり追い掛けている、やがて子供が力尽きて倒れると、その子に向かってアカデミア兵が言葉を吐く

「鬼ごっこはおしまいかな？」

「うう…こ…こないで…」

その子供を、僕は知っていた。この体に憑依したその日に、あのデュエルスタジアムでカイトの後ろに隠れていた小さな子

(ハルト…!?)

周囲はまだまだ混乱していて、ハルトを助けられる者は誰もいない。つまり、この光景はアニメでは語られなかったカイトが復讐に走るキツカケとなった出来事だ

「いや…いやだ…！」

必死に懇願するハルトの姿に同情する

可哀想に。でも僕は出ていく気はない。例え相手がどれほどの雑魚だろうと、そこから芋づる式に敵がやって来るようになる事は想像に難くない

だからその光景から目を背けて逃げようとし

「助け…助けて、兄さんっ!!」

逃げる…逃げ…

——ちくしょう!!

ダッ!

「何!」

「…兄さん?」

なんでだ、なんで飛び出した!?

後々絶対に面倒になる!逃げるべきなのに…クソ!クソ!

「悪かったな、お兄ちゃんじゃなくて」

「…あなたは…」

「後ろにいる」

目を丸くするハルトから目を背け、3人のアカデミア兵を見る。ど

いつもこいつも間抜け面を晒した後、高笑いしながら更に間抜け面を見せる

「ハハハハハ！こいつはいい！チビのガキを追っ掛けていたら獲物の方からやってきやがった！」

「おい、そいつは俺にやらせろ！」

「アンタはさつきやったでしょ！次は私よ！」

「いいや俺だ！」

敵を目の前に醜い争いをするガキ共。…そもそもこいつらがハルトを無闇に追っかけ回したりしなければこんな事にならなかったと思うと、腹の底からムカムカしてきた

「まとめて来い」

「…なんだと？」

「寝惚けてんのかクソガキ共？それとも耳くそでも詰まってるのか？3人まとめて相手してやるつつってんだよ」

そこまで言えば、言葉を理解したガキ共が憤る

「こいつ、エクシーズの獲物風情が生意気な！」

「徒党を組まなきやちっさい獲物も捕まえられんカスにはこれくらいの手ンデがちょうどいいだろう？とつとと来やがれ、雑魚共」

「貴様！いいだろう、後悔させてやる!!」

後悔？後悔だと？

「それをするのはお前らの方だ…！碎いて、踏み躪って、磨り潰して…二度とカードなんざ握れなくしてやるツ!!」

「」「デュエル!!」「」

「俺の先行！」「古代の機械兵士」を召喚！」

右腕の先端にリボルバー式の銃塔がつけられた機械の兵士が現れる。アンティーク・ギア「古代の機械」固有の「攻撃時、相手は魔法・罫を発動できない」という効果を持つだけな、低ステータスのモンスターだ

「先行は攻撃できないからな。俺はこれでターンエンド」

「俺のターン、ドロロー！俺も「古代の機械兵士」を召喚！ターンエンド

だ！」

「…ウツソだろお前…」

リンク全盛期の環境に慣れ過ぎた身からすれば信じられない光景だ。それだけ潤沢な手札がありながら、モンスター1体を召喚して何も伏せずに終了

手札事故なのかと思いきやあの自信満々の表情。この体たらくじゃ例え1期のカードプールしか使えなかったとしても、僕達の世界の住人に勝つことは不可能だな

「私のターン、ドロロー！私も「古代の機械兵士」を召喚！更にカードを1枚セットして、ターンエンド！」

かと思えば、最後の赤服のアカデミア兵(珍しいことに女子)はカードを1枚伏せてこっちにターンを渡してきた。前の2人が落第以下だっただけに、これには思わず拍手

「えらいえらい。ちゃんとカード伏せれるプレイングは出来たんだね。これはちよつと困ったことになったなあ」

「アンタ、バカにしてるの!?!」

「…当たり前だろ？自信満々に挑んできて、蓋を開けてみれば3人掛かりでこの程度…悪いこと言わないからサレンダーしときなよ？今ならデュエルディスクだけで見逃してあげるから」

そう言つて鼻で笑つてやれば、すぐ怒り心頭になるガキ

「このっ!!」

「落ち着け…状況が分かってないようだな？貴様らが使うエクシーズモンスターの殆どがステータスが低い代わりに効果が強力、しかしその効果も回数制限があるという始末だ。例え我々の内の1人を倒すことが出来ようと、後の2人に貴様は負けておしまいだ」

…なるほど、その程度の知識と対策はしてきたわけか

確かにエクシーズモンスターの効果はエクシーズ素材分しか使えないし、効果が強力な反面ステータスが控えめだというものあながち間違つてはいない…

しかし、しかしだ

「一体何年前の話をしてるんだそれは？」

「はあ？」

ぶつちやけた話、このデッキは最新のデッキではない。というのも流石に切り札であるデッキは奥の手中の奥の手であり、今使ってるデッキもエクシード次元で使っても怪しまれないよう、エクストラデッキをエクシードで縛ってるくらいだ

それでも、こいつら程度を薙ぎ倒すのは造作もないパワーを持ったデッキと言えるだろう…文字通り、な

「無駄話は終わりだ…これより蹂躞する。僕のターン。ドロ、スタンバイ、メイ」

フェイズを宣言しても伏せたカードは発動しない…カウンター罠？念には念を入れるか

「相手モンスターの数が自分より多い場合、速攻魔法「緊急ダイヤ」は発動できる。効果でデッキから地属性、機械族のレベル10、4のモンスターを1体ずつ守備表示で効果を無効にして特殊召喚する。「マシンナーズ・カーネル」と「バトレイン」を特殊召喚」

右腕にチェンソー、左腕にレールガンを装備した四足歩行の、カオス・ジャイアント「混沌巨人」程ではないが巨大なロボットが姿を現す。その陰から赤い列車もレールを引いてやってくる

「いきなりレベル10のモンスターだ?!」

「その程度でいちいち騒ぐなよ面倒臭い。地属性、機械族が召喚・特殊召喚されたことにより、手札から「トリック・レイン」の効果で自身を特殊召喚」

更に、後部車両にクレインを乗せた黄色い列車も登場する

「この効果で出てきた「トリック・レイン」は攻守が半分になるが、このデッキでは関係のない事だ」

「レベル10のモンスターが…2体…」

「「カーネル」「トリック・レイン」の2体を重ねてエクシード」

オレンジの巨大な球体になった2体が割れたコンクリートの上に現れた銀河の中央に吸い込まれていく。そして光の柱が立ち…アカデミア兵達を巨大な影が覆う

「来い。「超弩級砲塔列車グスタフ・マックス」」

3本のレールでようやく走ることの出来る巨体、堅牢な装甲、何より目を見張るのは地の彼方まで届かせると言わんばかりに大きく、どこまでも長い砲塔だった

超弩級砲塔列車グスタフ・マックス

ランク10 ATK3000

「攻撃力、3000:~!」

「グスタフ・マックス」の効果発動。エクシース素材を1つ取り除き、プレイヤーに2000の効果ダメージを与える」

「:はあ?!に、2000ものダメージだと?!」

「グスタフ・マックス」、照準合わせ」

「グスタフ・マックス」の周囲を旋回するオーバーレイ・ユニットが弾け、その巨大な筒先を、カードを伏せたアカデミア兵に向ける

ガコン

「わ、私?!」

「^撃FIRE」

ドオン!

簡素な言葉を引き金に放たれた砲弾は、そのアカデミア兵の目の前に着弾し、爆風で容赦なく吹っ飛ばしていく

「きやああああ!!」

アカデミア兵C LP2000 手札3枚

吹っ飛ばされた女子生徒の仲間を見て、リーダーと思わしき男が忌々しげにこちらを見るが、知ったことではない

「クソ、なんて効果だ!」

「今エクシース素材として墓地に送られた『デリック・レーン』の効果
を、伏せたカードを対象に発動。対象のカードを割る」

流れるようにセットされたカードが光の破片となって粉々に砕け散っていく。破壊したのは:「アンティーク・ギアリボン古代の機械蘇生」?なんだ、警戒して損した

「ああ!?「古代の機械蘇生」が!」

「更に「グスタフ・マックス」を上から重ねてエクシース」

「な、何?!」

強烈なインパクトを刻み込んだ「グスタフ・マックス」が小さく圧縮された光球になり、自身のオーバーレイ・ユニットと共に銀河の中に飛び込む

そうして現れるのは、先ほどよりも巨大で、圧倒的で、これまた長身な砲塔を携えた戦闘列車

「超弩級砲塔列車ジャガーノート・リーベ」をエクシーズ召喚」

超弩級砲塔列車ジャガーノート・リーベ

ランク11 ATK4000

「グスタフ・マックス」以上の怪物が登場したことにより、とうとう戦意が挫けたアカデミア兵が尻もちをつく

「こ、攻撃力、よん、せん…？な、なんだよ…！なんだよお前え!!」

「ジャガーノート・リーベ」の効果発動」

それに意を返す事もせず、僕は粛々とデュエルを進める。それがより恐怖を煽るのか、3人とも真っ青な顔でこちらを見る

「ジャガーノート・リーベ」の攻撃力を2000アップさせる」

ATK4000↓6000

4000という元々暴力的な数値が更にパンプアップされ、この世界では一撃受けるだけでモンスターを通して2000以下ではワパン、それ以上でも致命傷は避けられないモンスターが3人の兵士を威圧する

「う、うわあああああ!!」

「あ、おい!」

それを見て、恐怖に屈した1人が背を向け逃げ出す

「逃がすかよ。バトルフェイズ、「ジャガーノート・リーベ」で「古代の機械兵士」を攻撃」

ガコン

おあつらえ向きな事に「古代の機械兵士」もプレイヤーに随行している為、追い討ちをかけるにはちようにいい

「照準……FIRE」

ドオ…オオオン!!

彼方まで届く轟音を響かせ、「ジャガーノート・リーベ」の砲塔が火

を噴く。数秒してから着弾し、「古代の機械兵士」と一緒にプレイヤーのライフを焼き尽くす

『ぎゃああああああああっ!!!』

聞くに堪えない悲鳴が、遠くから木霊した

アカデミア兵B LP 0

「あ、あああ……」

もはやこいつらは狩人ではない。獲物でもない。絶対的強者に捕食されるだけの餌だ

なんと弱いのか、なんとつまらないのか。こんなクソみたいな世界観でなければもっとグレードの低いデツキで遊んであげても良かったのだが、生憎と死にたくはない。だからこそ、代わりにこいつらには地獄を見せようのだ

「ジャガーノート・リーベ」は通常の攻撃に加えエクシーズ素材の数だけモンスターに攻撃出来る」

「……え？」

「古代の機械兵士」に攻撃」

ガココン

「や、やめ——」

「FIRE」

聞く耳持たん

ドオオオン!!

「ぐああああああああ!!!」

アカデミア兵A LP 0

エクシーズ次元産のデュエルディスクは質量を持たないため、普通なら肉体にダメージはないし、精々軽いショックを受けたりするくらいだ

しかし衝撃の強さはダメージ総量に比例する事があるところの世界である程度過ぎて知った。だから初期ライフ(アニメ)を一撃でもっていく衝撃は相手を簡単に吹き飛ばし、そのまま壁面に叩きつけ

られて気を失った

そんな仲間達の末路を見て、残った女子は座り込んだまま後退り、ガタガタと震えながら涙を流して怯えていた

「ひっ…ひい…!!」

「「ジャガーノート・リーベ」のエクシーズ素材は1つだけだからもう攻撃は出来ない。カードを1枚伏せてターンエンド。……………どうした、お前のターンだぞ?早く進めろ」

「わ、わたしの…………わ、わたしは…………」

プライドがそうさせるのか、それともマトモに動けないからか、デッキの上に手を置こうとしては引つ込め、かと思えばゆっくりとデッキの上にも手をかざそうとする

「言っておくがサレンダーは認めん」

「!? な、なんで!?!」

「お前が惨めに這い蹲って命乞いする姿が見たいからだ」

「ふ、ふざけないでよっ!!この悪魔!!」

「ふざける?ふざけるだど?お前達にだけは言われたくないよ。これだけの事をしておいて、ふざけてるのはどっちだって話だ」

僕自身は割り切ってるため怒りはそこまでないが、胸の奥底から鬱々とした怒りと憎しみが何故か湧き上がってくる。きつとそれは「ふうと」のもので、それだけこの侵略行為が許せないのだろう

「さあ、早く立て。カードをドローしモンスターを召喚しろ。魔法を使つて罫を伏せる。エクシーズの獲物とやらを狩ってみせろ!」

「いや…いやあ…いやあ!!」

「お楽しみはこれからだ!!早く!早く早く!!
ハリーハリーハリーハリー
早く早く早く!!」

「だめっ!!」

その時だ。制止する大声と同時に脚に誰かがしがみついたのは後ろに顔を向ければ、見慣れた怯えた表情の、しかし強い決意の眼差しをしたハルトと目が合った

「もう、やめて…これいじょう、だめ…!」

「……………」

周りを見渡す。先ほど吹き飛ばした2人はどこにも見当たらない。多分原作でも描写されていた、アカデミア製のデュエルディスクによる強制帰還システムで融合次元に戻されたのだろう

ならば、この赤ん坊のように泣きじやくる兵士のデュエルディスクは、今最速で手に入れられる次元跳躍装置というわけだ

「質問に答えろ」

兵士はビクリ！と体をビクつかせる

「僕の質問と要求に応えるなら、これ以上お前を攻撃しないし見逃してもやる。だから正直に答えろよ？」

「わ、わかっ、たわ……」

確認を取って、分かり切った質問をする。如何にも今知りましと云った風に演技しなければ

「お前達は何者だ？」

「融合次元のアカデミア……」

「融合次元？意味が分からんぞ、正直に答えろと言ったよな？この期に及んで戯言を吐く気なら……」

「ほ、本当よ！私達は融合召喚を使う次元で生まれて育った住人！アカデミアって組織に所属していて、このエクシード次元を侵攻する為に次元を超えてやってきたの!!」

矢継ぎ早に言葉を吐く様子を見て、よっぽどさっきの脅しが効いたようだと思った。省みる気はさらさらないが

それより、ここからが本題だ

「ツツコミどころはたくさんあるが……じゃあ、どうやってこのエクシード次元とやらにやってきた？」

「……私達のデュエルディスクには次元跳躍システムが組み込まれているの。このデュエルディスクを使えば、単独で次元を超えることが出来るわ」

「ふむ……やり方は？」

「デュエルディスクをつけて、このボタンを押してから行きたい次元にタッチすれば……」

パネルには “standard” “fusion” “synch

r o “ x y z ”と表示された画面が映る。よし、ここまで分かれれば

「なら最後だ。そのデュエルディスクを寄越せ」

「え!?そ、それは……」

「いやか?」

背後にはまだ「ジャガーノート・リーベ」が控えている。こうすれば領くはずだ

「うう…わ、わかっ——」

カッ!

その時だった。そいつのデュエルディスクから嫌な感じのする光が漏れ出たのは

僕は即座にハルトを抱えて距離をとるが、アカデミア兵は腕に装着しているからその光から逃れられない。というより、その光は何故か装着者だけを照らすように発している

「う、嘘ッ、なんで!?助けて!お願い!たすけ——」

その命乞いは途中で途切れた。一際強い光が発したと思うと次の瞬間には消え、光の中心点に残っていたのはたった1枚のカード

「マジかよ」

そのカードを拾う。名前とテキストに何も書かれてないカード。唯一描かれているのは、さっきのアカデミア兵が絶望した表情のみ

「……クソっ!!」

ガッ!

「ッ!」

アカデミアのデュエルディスクを手に入れるという目的が思わぬアクシデントで妨害された苛立ちを、地面の瓦礫を蹴る事で霧散させる

敵にこちらのデュエルが漏れたかもしれないのに、得るものが何もないという結果にこれからどうすべきか悩んでいると

「ハルトー!!ハルトオオオー!!」

「……! にいさん!!」

「ッ! ハルト!!」

ハルトの名を叫ぶカイトが出てきた。ハルトは自分の兄を認識するとすぐさま駆け寄り、カイトもそんなハルトを見つけるとしやがみこみながら、飛び込んでくる弟を強く抱き締めた

「ハルト、大丈夫か!？」

「うん…あのひとが、ぼくをたすけてくれたから」

「お前は…」

驚いた表情で僕を見るカイト。即座に気持ちを切り替えたのか、真剣な顔で話し掛けてくる

「詳しく話を聞きたいが、今この街は危険だ。郊外にデュエル庵という隠れ家がある。急ごう」

「いや、僕は…」

一瞬断ろうと考えたが、今後の行動を考えれば安全な寢床は欲しい。大丈夫だ、レジスタンスなんぞ参加する気はない。デュエルデイスクが手に入ればすぐさまよならだ

「…なんでもない。案内、頼む」

「ああ。…ハルト、乗れ」

「うん…」

カイトはハルトを背負うと、街の外に向かって走り出し、僕もそれを追い掛ける

…さつき得るものが何もないと思ったが、この兄弟が引き裂かれることなく一緒にいる姿を見ただけまあ儲けものだ…そう思い込むことにした

第8話

山中の竹林の中にある古風な建物、デュエル庵。そこには逃げ延びた人々や、おそらくクローバー校生と思わしき子供達が大勢いた。クローバーということはもちろん…

「風斗!?無事だったのか!?!」

「アレン…それにサヤカか」

神月アレンと笹山サヤカの姿もあるということだ

「大丈夫…ハルトと一緒にカイトに保護されてな。なんとか助かったよ」

「そうか…クツソ!!いきなり街を襲ってきやがって、何なんだアイツらは!?!」

「ア、アレン、落ち着いて…」

故郷を破壊されて怒るアレンと宥めるサヤカ。僕にその感情の理解は出来ないが、ドス黒いこの気持ち悪さだけは実感出来る。そうか、僕の中の「お前」もそう思っているのか…

「白星…いや、風斗」

「…カイト」

「ハルトから話は聞いた。ありがとう、弟を守ってくれて」

そう言つて頭を下げるカイトに僕は言う

「頭を下げるな」

「しかし…」

「いいんだよ。だから、下げないで」

「…分かった…」

カイトは勘違いしている。あの時動き出したのは、きつともう一人の「僕」だ

僕が居なければ、「ふうと」の実力であればきつと何も出来ずハルト諸共カードにされてたかもしれない。でも脚を動かした。力があつても尚見捨てる選択をした僕とは違う

罪悪感、なのだろうか?何を犠牲にしても帰ると決めたのに、想像以上に僕は決意出来ないらしい

「それと、ハルトから聞いた話だがいくつか要領の得ない部分があった。説明出来るか？」

「…仕方ない。分かっている範囲で話す。とりあえず、デュエルを出来る人を集めてくれ、情報を共有する」

そう言いながら、僕は伝えるべき情報を頭の中で精査していくのだった

—————

デュエル庵の奥部にあるデュエルコート。そこにはカイトやサヤカ、多くのクローバー生が集まっており、みんな俺と一緒に前で説明する…ココ最近ですっかり変わっちゃまった幼馴染を見ていた

「——これが、現在分かっている範囲の情報だ」

「融合次元…アカデミア…」

「侵略戦争だと…!?ふざけるなっ!!何の権利があって俺達にそんな!!」

「本当なの、それ…?」

風斗から語られた内容はあまりにも荒唐無稽だった

融合召喚とやらを扱う「融合次元」の存在、アカデミアという組織、そしてそのアカデミアによる俺達エクシーズ次元への攻撃。SFじゃあるまいし、どうやって信じるというのか

しかし、その証明をしてくれたのは俺達の中でも一番の強さを誇るであろうカイトだった

「俺は信じる。弟の言っていたことと矛盾は感じない…それに、何度か応戦した時、確かに奴らは「融合」という魔法カードで未知のモンスターを召喚した」

「信じられないなら無理に信じなくて良い。大切なのは敵は「実体を持ったモンスターを操り」「未知の召喚法を使い」「エクシーズ次元の人間をカードにする侵略」を行っているという点だ」

「ちよつと待て！今なんて言った？人間をカードをするだど?」

他の奴が声を上げて質問をする。誰もが口にしていた『突然現れた

敵は人々をカードに変えていた』という噂と一緒に一緒のものだが…まさか！

風斗は懐から一枚のカードを取り出し、それを少々苦々しい面持ちで眺めると、全員に見えるように見せつけた

「これは、尋問していた奴がカードに変えられた姿だ。何かに使えると思つてデュエルディスクを鹵獲しようとした時、ディスクから出てきた光が装着者自身をディスクごとカードに変えた。技術漏洩防止のためか、裏切り者への粛清か…少なくともアカデミアとやらのトップは、末端の人間を使い捨てるの消耗品程度にしか考えていないのだと思う」

それを見て、俺は「ざまあみろ」という気持ちよりも「どうして」とあう疑問が先走った。そしてそう思っていたのは、俺だけではなくサヤカや他の奴もそうだった

「ひどい…！」

「味方も無理やりカードに変えるなんて」

「自業自得だろ！あんな事しておいて…！」

「でもいくらなんでも…」

周りで意見が別れている。そりやそうだ。許せない気持ちは俺もあるが、だからってあんな「苦しそうに泣いてる顔のカード」を見て平気な奴はいない

「同情するな」

冷徹な声が聞こえた。風斗は今までに見たことがないほど冷たい表情でこちらを見ていた

「あいつらは少なくともハンティングゲームをしている感覚で侵略を楽しんでるクズだ。情緒もなく、倫理もなく、デュエリストとしての誇りすらないエイリアンみたいな奴らだ。お前達は許せるのか？僕は…分からない。でも胸の奥から込み上げてくるこの黒々とした感情は間違いなく『白星 ふうと』」

「ものだ」

一呼吸置いて、言う

「許したければ許せばいい。怖ければ戦わなくていい。でも、今日と

いう日を忘れるな。故郷を、日常を、思い出を、デュエルそのものを穢したのは融合次元のアカデミアという事を…決して、忘れるな」

みんな、息を呑んで静まり返っていた。クローバー校のみんなは風斗がドジで、おっちょこちよいで、天然な事を知っている。そのギャップもあるのだろうか、あいつの演説には惹き付けられる何かがあった。特に、デュエルを侵略の道具にした事があいつは許せなかったらしい

「……話が長くなった。とにもかくにも、この情報を他の隠れ家にいる人達にも共有して、アカデミアへの対抗策の実行…何よりリーダーを決めないと」

「リーダー？」

「そう。敵は明らかに統率の取れた軍隊であり組織だ。無闇矢鱈にゲリラ戦で戦っては守るものも守れない…だからこそ、敵を理解し、戦略を学び、みんなが着いていきたいと思える象徴が必要なんだ」

「そして」と呟き、風斗が歩き出した先にはカイトがいて…その肩をとって言った

「そのリーダーこそ、カイトが相応しい」

「俺だと…？」

「カッコ良さ、厳しさと優しさ、何よりデュエルの強さ、全てにおいてお前が相応しい。…頑張れカイト、お前がナンバーワンだ」

すごく、すごくイイ笑顔で言い切る風斗だった

しかし、カイトは静かに目を閉じて黙考すると、キラキラした目を見返しながらこう言った

「いいや、その役目に相応しいのは俺ではない」

「え」

「突然の侵略に対する素早く冷静な対応、みんなを纏め上げ、それでいて未来のビジョンを明確に見据えた考えの深さ、デュエルの強さ…何よりその強固な意思は、みんなを引っ張っていくのに必要な力だ」

「え」

「リーダーは風斗……お前がなるべきだ」

「え」

カイトがつつらと根拠を上げる度に、風斗の澄み切った川のような目がドロドロと淀み切ったものに変貌していき…最後に絶叫した

「何でだアアアアアアア!!?」

「うわっ!? オイ、急にデカい声出すなよ!!」

「いやいやいやいやアレン君!! 今の話の流れおかしくない!?」

「えっと、そんなにおかしくはないと思うけど…」

サヤカの意見に大勢が肯定する

風斗自身のおかしさはかなり長続きしているが、ハッキリ言って今の幼馴染は非常に頼りになると思っている。この異常事態で取り乱さず（今はすごく狼狽しているが）ドツシリと構えている姿は全員に安心をもたらしていた

こいつがいれば大丈夫、こいつがいれば何とかなるかもしれないという気にすらさせてくれる今の風斗の姿は、俺達の精神的支柱になってくれるという確信があった

流石に全部任せるといっものはこいつのドジっぷりを知っている身としては不安になるが、それも俺達の方で支えればなんら問題はないだろう

だというのに、風斗は顔と手を残像が出るほど横に振って断ろうとしてくる

「無理無理無理無理無理無理!! 絶対僕には荷が重過ぎるって!!
ネネ、カイト君! 君の方が絶対リーダー相応しいから! やろ! ネット!
!？」

なんだろうか。この卑屈なまでに謙へりくだっている幼馴染を見ていると、本当にこいつに任せていいのかという疑問が過ってくる。以前までのお前でもここまで酷くはなかったぞ

「そうか………分かった」

「おおっ!!」

「——俺とお前でデュエルをしよう」

「ぜんぜんわかってない!!」

望み尽きたと言わんばかりに崩れ落ちるバカを見据えながら、クローバー校最強のデュエリストとクローバー校きつての問題児が

デュエルするとうい、前代未聞の対戦カードが組み込まれるのだった

第9話

(どうしてこうなった!?)

胸中に抱くのは疑問と絶望だった

こんなハズではなかったのだ。本来ならカイトをリーダーに据え、裏方になる事でレジスタンスの操作し、そうして幾つか手に入れたアカデミアのデュエルディスクをくすねて原作終了までスタンダード次元で隠れ潜む…という完璧な計画だった

それがっ！何故っ！天城カイトとデュエルする事になってるんだっ！

「ねえカイト」

「なんだ？」

「こんな無益な事はやめよ？そもそもカイトはサヤカの応援の時に僕のデュエルの実力を見てるでしょ？ならどっちが強いかなんて分かり切って…」

「俺は回りくどい言い方が好きじゃないからハッキリ言うぞ。あれはお前の本来のデツキではないだろう」

あまりに核心のついた言葉に思わず動きを止めるが、まだ切り返せると思い言う

「いや、あれは間違いなく僕が昔から使ってきたデツキだよ」

「ならばここ最近で新しくデツキを組んだか。少なくともお前がアカデミアと戦っていた場所で「グスタフ・マックス」や似たモンスターを召喚したのを俺は見ている。ハルトにも確認を取った」

だめだつよすぎる。ハルトにも確認を取ってるんじゃない訳のしようがない

そう思っていると、観客の最前列にいたアレンが驚いた様子で声を上げる

「グスタフ・マックス」!?お前あれを召喚したのかよ!」

「アレン、それってすごいのか？」

「グスタフ・マックス」は俺が使ってる「列車」カードの強力なエクシーズモンスターだ。でもそいつはランク10の超重量級モンス

ターだから、デツキ構築の段階で殆どの奴が挫折するくらい召喚の難しいモンスターなんだよ」

「ランク10!？」

「俺だってランク4の「アイアン・ヴォルフ」までしか召喚出来ねえ。それをあいつ、一体どうやって…?」

え、何その扱い？

「え、そんなに召喚難しい?」「エクスプレス・ナイト」とか「デリック・レーン」使えば召喚出来んじゃないの?」

「それだとデュエルする時に大体事故つちまうって説明したじゃねーか! つーかそれで納得が出来ないって実際にデツキ組んで実験して、事故り過ぎて怒ってたのお前だぞ!」

そんな事あったんだ。多分憑依する前のことだろうが…まあ言ってることは分からんでもない。「列車」関連のサーチやリクルートカードがなければロクに回らないし、それらがあっても事故ることがあるのが列車デツキだ。それでも最低限回りはするが

「なに、デュエルをすれば結果は自ずと見えてくる」

「あのさ、「グスタフ・マックス」とか出したらこの場所がアカデミアにバレるんじゃない」

「ソリッドビジョンのモンスターの大きさは事前に設定出来る。最小にすればバレないだろう」

逃げ道を完全に塞がれてしまった。弱いデツキを使ってわざと負けるという選択肢もこれで消え失せた。ログがある以上露骨な手抜きもバレる

こうなったらもうカイトが完璧な手札になって、こっちが完璧な手札(嘘)になつてくれる事を祈るしかない、アレンに設定の弄り方を教えてもらいながら思うのだった

「デュエル!」「デュエル」

「先行は僕か…:ムッ!」

すごい手札だった。「転回操車」「転回操車」「無頼特急バトレイン」

「ライトニング・ストーム」「緊急ダイヤ」と、とても後攻向きな手札だった。特に「転回操車」がダブっているのがいい

(オイオイこれじゃ…Meの負けじゃないか！)

カイトのデッキは「ギョラクシューアイズ・サイファー・ドラゴン銀河眼の光波竜」系統のエクシーズモンスターの召喚に特化した「サイファー光波」デッキで、1ターンで4000ライフを削り切ることが容易な、そこそこ強力なテーマである

普段なら「バトレイン」辺りを伏せてワンキルされない事を祈るところだが、これならむしろ次のターンに備えたと見せ掛けてから空きのフィールドを提供してやればいい！

「スタンバイ、メイン、僕はフィールド魔法「転回操車」を発動」

周辺の景色が激変し、周囲には列車を乗せた大量のレール、そして中心に方向転換に必要なターンテーブルが出てくる

「こいつは手札1枚をコストにデッキからレベル10、機械族、地属性のモンスターをサーチ出来るカードだ。「バトレイン」をコストにデッキから「バレット・ライナー」を手札に加える」

「あんなカード、見たことねえ！一体どこで…」

今はその驚きの声すら心地いい

「カードを1枚伏せてエンドフェイズ」

「えっ、モンスターを召喚しない!? だったら何でさつき、モンスターカードをコストに…?」

「いや、「バトレイン」の効果は」

「エンドフェイズ時、墓地に送られた「バトレイン」のモンスター効果で、デッキからレベル10、機械族、地属性モンスターを手札に加える。「デリック・レーン」を手札に」

改めてエンドフェイズになり、ターンがカイトに移行する

「そっか、次のターンに備えて風斗は…」

「ああ。でも、そんな悠長な戦術が通じるほどカイトは甘くねえ！」

知ってるさ！アニメ後半に出てきただけあって強キャラだったからな…これでリーダーの義務を押し付けて僕は悠々とスタンダードに逃げられる…フツフツフツフ！(クソミンゴ感

「俺のターン、ドロー！」

6枚になった手札を見た後、カイトがこっちを見る

「風斗…まさか、この期に及んで手抜きしているわけではあるまいな？」

「もちろんさあ☆僕はいつだって全力だよ☆」

嘘である。本当に勝つつもりなら「バトレイン」は伏せて、2枚目の「転回操車」か腐った「ライトニング・ストーム」をコストにするのが1番生存率が高い。でもそうなる困るから分かりにくいプレミをしたのだ

「……そうか……」

するとカイトは静かに目を閉じて、呆れたように息を吐く

そして…とんでもない事を言い出した

「ならば、俺がリーダーになった暁にはお前を決して外に出さないようにしなければならぬな」

「……………はい？」

「さっきも言ったが、お前は今後の対アカデミアに必須の人材だ。そんな奴が外に出た時にアカデミアにやられれば俺達の損害は計り知れない。お前なら分かってくれるだろう？」

「え、いやいや、なんでそんな極端な？別に僕がリーダーになれなくたって…」

「仕方があるまい」

その言葉通り、本当にどうしようもなさそうに僕を見ながら、悪い笑みを浮かべて言った

「弱い奴を危険な戦場に出すわけにはいかないからな」

「――」

挑発だ。カイトの人柄を考えれば、弟の命の恩人を無意味に嘲笑する理由などない。カイトはわざと負けようとしているこっちを焚き付けているだけだ

しかし参った。こんな事を言われてしまつては負ける訳にはいなくなる。ハツタリとは思うが、万が一にも監禁される可能性があるくらいなら、リーダーになつて自由時間を調整出来る立場になつた方がいいかもしれない

あと、全く、全然関係ないんだけど

「言ってくれんじやーん…!!」

言われっぱなしなのはしように合っていないんだよねえ、僕ウ…!

「やっとその気になったか…行くぞ。俺は「サイファー・ツイン・ラプトル光波双顎機」を召喚
!」

出てくるのは水色の光る体に紫の鎧をつけて出来た肉食竜。一对の翼膜には虹色に輝く幾何学模様、そして双顎の名の通り、ラプトルの顎の下から巨大な2本の牙が伸びていた

「光波双顎機」の効果!手札を1枚捨て、手札・デッキから「光波」モンスター1体を特殊召喚することが出来る。デッキから「サイファー・バイブレン光波複葉機」を守備表示で特殊召喚!さらに自分フィールド上に「光波」モンスターがいる時、「サイファー・ウイング光波翼機」は自身の効果で手札から特殊召喚出来る!」

「光波双顎機」が雄叫びをあげると時空に穴が空き、そこからこれまた虹色に光る翼を持った複葉機が姿を現す。続けて小さい箱に二対の翼が生えた奇っ怪なモンスターが出てくる

「光波複葉機」の効果!俺の「光波」モンスター2体を選択し、そのレベルを4つ上げる!この効果で「光波翼機」と「光波双顎機」のレベルを8に!」

レベル4↓8

「レベル8のモンスターが2体!」

「来るぞ、風斗!」

「俺はレベル8となった「光波翼機」と「光波双顎機」で、オーバーレイ!」

アレンがアストラルみたいな事を言った直後に、カイトの手によって2体の「光波」が球体になって渦に飲まれる

「2体のモンスターで、オーバーレイネットワークを構築!エクシース召喚!!」

そうして光の爆発と柱の中から出てきたのは…瞳に銀河を宿した
巨大な竜

「闇に輝く銀河よ！希望の光になりて、我が僕に宿れ！光の化身、ここに降臨！現れよ!!」

「ランク8！ギヤラクシーアイズ・サイファー・ドラゴン「銀河眼の光波竜」!!」

銀河眼の光波竜

ランク8 ATK3000

「来たか」

天城カイトの切り札、象徴、代名詞、「銀河眼」ギヤラクシーアイズ

「サイファー・ドラゴン光波竜」はモンスター除去の中でもかなり厄介な「コントロール奪取」の効果の内蔵されたエクシーズモンスター

しかも名称を「銀河眼の光波竜」に、攻撃力を3000に変える。おまけにカイトはアニメキャラにしては珍しく切り札を最低でも2積みしている為、こいつを片付けても新しいのがまた出てくるという面倒くささまで備えている

「バトルだ！「銀河眼の光波竜」でダイレクトアタック！」

「その攻撃宣言時に「緊急ダイヤ」発動。自分フィールドのモンスターの数が相手より少ない場合発動可能で、デッキから機械族、地属性のレベル10、4のモンスターを効果を無効にして守備表示で1体ずつ特殊召喚する」

「はあ!?!強過ぎさんだろそのカードツ！」

またアレンがなんか騒いでるが無視無視

「マシナーズ・カーネル」と「爆走軌道フライング・ペガサス」を特殊召喚」

フィールドに「マシナーズ・カーネル」が、そして先頭車両が騎士を乗せたペガサスの列車が現れる。ちなみにだがこのペガサスに乗ってる騎士、とある超弩級つほいπな女の子と非常に似通っているのだが、きっとKONAMIからのファンサービスだろう

「…ならば「マシナーズ・カーネル」を攻撃する！行け、「光波竜」!!殲滅のサイファー・ストリーム!!」

竜の口内が輝き、そこから眩い光線が伸びて「カーネル」の装甲を

貫く。守備表示のダメージはないが、爆風による衝撃が皮膚を強く撫でる。流星にレベル10は残してくれないか

「(上手いな。バトルに入ってから特殊召喚する事で「光波竜」の効果を避けた。「光波竜」を警戒していた? いや…動作があまりにスムーズだ。バトルフェイズでカードを発動すれば対処する手段がかなり制限される。それを理解していたからこそその淀みのなさであり…だからこそ、これ程のタクティクスを持つデュエリストが何故今まで埋もれていたのが不思議だ…)バトル終了後、俺は「銀河眼の光波竜」のモンスター効果を発動! オーバーレイ・ユニットを1つ使い、「フライング・ペガサス」のコントロールをターン終了時まで得る! サイファー・プロジェクション!!」

「…あれ? このタイピングで使うって事はまさか」

疑問が答えられる間もなく「光波竜」の全身から発せられた光が「フライング・ペガサス」に浴びせられると、「フライング・ペガサス」が未完成の3Dグラフィックのような「銀河眼の光波竜」に変化し、カイトのフィールドに移動する

「この効果でコントロールを得たモンスターは攻撃力が3000となり、名も「銀河眼の光波竜」として扱う事になる。そして俺は「銀河眼の光波竜」と化した「フライング・ペガサス」で、オーバーレイネットワークを再構築!」

「オイツー!」

予想は出来てたけどマジでやりやがった!

「闇に輝く銀河よ! 希望の光重ね合わせ、暗黒を照らす極光となれ! ランクアップ・エクシーズ・チェンジ!!」

「降臨せよ! ランク10!」

「ギャラクシーアイズ・サイファー・エクス・ドラゴン銀河眼の極光波竜!!」

眩しいまで虹色の光を放つのは巨大な4枚の翼。「光波竜」よりさらに巨大に、そして鋭利な甲殻を纏った光のドラゴンが姿を現す

銀河眼の極光波竜

ランク10 ATK4000

ええー、ホントに出てきたよ。アニメじゃ使ってなかったはずなのに(そもそも時期的に影も形もなかったカードだけど)こうなると今後「光波竜」に奪われたモンスターは諦めざるを得なくなる

「さらに「銀河眼の光波竜」で、オーバーレイネットワークを再構築!」

「だからオイツ!!」

サイファー・エクス・ドラゴン
「極光波竜」のランクアップは1ターンに1度しか出来ない以上、出てくるのあいつになるんだが!?

「闇に輝く銀河よ!光研ぎ澄ましたその刃で、襲い来る闇を斬り払え!ランクアップ・エクシーズ・チェンジ!!」

「現れよ!ランク9!」

ギヤラクシーアイズ・サイファー・ブレード・ドラゴン
「銀河眼の光波刃竜」!!」

姿形は「銀河眼の光波竜」に似た竜。しかし「光波竜」とは違い、その竜の両腕には身の丈の半分はある光の刃がキラキラと輝いていた

第10話

銀河眼の光波刃竜

ランク9 DEF2800

このバカヤロウ!!バカヤロウツ!!いくら何でもやり過ぎだろ!?!しかも守備表示つてところが一際厄介なんだよチクショウ!

そう思っていたのは僕だけではないらしく、アレンも握りこぶしを作りながら大声で抗議する

「おいカイト!幾らなんでもやり過ぎだろ!!」

「アレン、今にこいつの実力が分かる」

「ハア?」

「見ていろ…「銀河眼の光波刃竜」の効果発動!オーバーレイ・ユニットを1つ使い、フィールド上のカード1枚を破壊する!選ぶのは「転回操車」!」

「サイファア・ブレード・ドラゴン光波刃竜」の腕刃が光り輝くと高く飛び上がり、振るった光刃から斬撃が飛び出して、ターンテーブルやレールを破砕する

「そして永続魔法「ダブル・エクスボージャ二重露光」を発動!この効果により「銀河眼の光波刃竜」を選択し、俺のもう1体のモンスター「銀河眼の極光波竜」は「光波刃竜」と同名扱いになる。カードを2枚セットし、ターン終了時に「光波双顎機」の効果で墓地に送った「サイファア・ミラーナイト光波鏡騎士」の効果、デッキから「光波双顎機」を手札に加える。俺はこれでターンエンドだ」

「僕のターン。ドロ、スタンバイ、メイン」

引いたカードは「灰流うらら」。ぶっちゃけ初手に来てほしかった状況を整理しよう。相手フィールドには「極光波竜」と「光波刃竜」がそれぞれ攻撃表示、守備表示でいて同名カード扱い、「複葉機」が守備表示。「二重露光」は現状無視していいが、警戒すべきは2枚の伏せカード。事前に「二重露光」を使った事から「光波」系統だと思いが、「光波」はカード化されてないカードも多い(そもそも把握出来てない)から何が飛んでくるか分からない。そもそも汎用罫だって可能性もある

つまり…いつも通り先に処理すればいい！

「まずは自分フィールドに表側表示のカードがない時、「ライトニング・ストーム」を発動。これは相手の『攻撃表示モンスターを全て破壊する』か『魔法・罫を全て破壊する』かを選んで発動出来る」

「擬似「サンダー・ボルト」と「ハーピィの羽根帚」のどっちかを選べるカード!？」

「転回操車」を破壊したのが裏目に…」

サヤカの言うように、「転回操車」のサーチを止めようとしたのが仇となったな。これでその魔法・罫ゾーンをキレイに吹っ飛ばしてやる！

「当然ツ！魔法・罫!!」

「カウンター罫「大革命返し」!!」

「つてハア!？」

「ライトニング・ストーム」の発動を無効にし、ゲームから除外する！

立体投影された「ライトニング・ストーム」のカードから嵐の如き雷が降り注ぐが、バリアのようなもので電撃を全て防がれてしまった「なんでそんなカード入ってんの!？」

「何を言う。俺の「光波」は永続魔法と永続罫を多用するデッキ、それらを破壊する対策くらいして当然だろう」

ああそうか。1枚2枚割られた程度じゃ機能停止しないことを考えれば、全体除去への対抗策にリソースを割くのは当たり前前か

でもおかげでとんでもなくピンチだ。デュエリストは僕ら^{OCCG民}と思考回路が違うせいかどうかどうも読み違えてしまう

「仕方ない、フィールド魔法「転回操車」発動」

「2枚目…持っていたのか」

「手札の「灰流うらら」をコストに「ナイト・エクスプレス・ナイト」をサーチ、そしてこのカードは攻撃力を0にする事で妥協召喚することが出来る」

「妥協召喚?」

「…ああ。リリースなしで召喚するって意味」

「なるほど」

けたたましい音と光と共に、ランスと盾を持った騎士の上半身がくつついた先頭車両の列車が登場する

「機械族、地属性が召喚された事により「デリック・レーン」を特殊召喚、さらに同じ条件のモンスターのみが自分フィールドにいる時「バレット・ライナー」は特殊召喚出来る。共に守備表示」

「レベル10のモンスターがこんなにあつさり…」

「来るか…」

「レベル10の「エクस्प्रेस・ナイト」と「デリック・レーン」でエクシーズ。「超巨大空中宮殿ガンガリディア」をエクシーズ召喚」

爆光の中から現れるは、赤い鉄柱をカヌーのように繋げた巨大な空飛ぶ舟とも呼ぶべき、とてつもない存在感を放つ宮殿だった

超巨大空中宮殿ガンガリディア

ランク10 ATK3400

「「グスタフ・マックス」じゃない!？」

「でも、大きいよアレン…ソリッドビジョンを最小サイズに設定してあの大きさなんて…」

サヤカの言う通り、「ガンガリディア」は最小サイズにも関わらず背後の空間をギリギリ埋め尽くす巨大なモンスターだった。…今後外で活動することも考えて、使うデッキ考え直すか…

「「ガンガリディア」の効果。エクシーズ素材を1つ取り除き、フィールド上のカードを破壊、その後1000ポイントの効果ダメージを相手に与える」

「破壊とバーンを同時に行う効果!」

「破壊するのは当然その伏せカード」

ビームが裏向きのカードを粉碎。破片がカイトに降り注ぎ、少ないダメージを与える

「くっ…」

天城カイト LP3000

破壊したのは…「光波防壁」サイファー・シールド?効果はこのカードがフィールドに存在し、同名の「光波」モンスターが2体以上いる限り、そのモンス

ターは戦闘で破壊されず、効果ダメージは0になる…

「……………あつー！やらかした！」

もし「グスタフ・マックス」を召喚していたら、効果ダメージは0にされるけど「極光波竜」に戦闘耐性も付与されるから、「ジャガーノート・リーベ」のサンドバッグにして2000×2の戦闘ダメージでちょうどライフを削り切れたのに！

「クツソ……エクシーズ素材として墓地に送られた「グリック・レーン」の効果！「銀河眼の光波刃竜」を破壊！」

「エクシーズ召喚した「光波刃竜」が相手の攻撃または効果で破壊された時、効果発動！墓地の「銀河眼の光波竜」を特殊召喚する！」

「また守備表示……ええい、ランク10の機械族である「ガンガリディア」を素材にエクシーズ！」

「何!？」

「超弩級砲塔列車ジャガーノート・リーベ」をエクシーズ召喚！」

超弩級砲塔列車ジャガーノート・リーベ

ランク11 ATK4000

「こ、こんなエクシーズモンスターが……！」

「すごい……！」

アレンやサヤカ、大勢のクローバー生がポカンとしている中、カイトだけは強い眼差しで警戒していた

「これはあの時の……！」

「「ジャガーノート・リーベ」の効果発動！エクシーズ素材を1つ取り除き、このカードの攻撃力を2000アップさせる！」

「攻撃力6000だど!？」

ATK4000↓6000

「バトルフェイズ！「ジャガーノート・リーベ」で「銀河眼の極光波竜」を攻撃!!」

「迎え撃て、「極光波竜」!!」

「FIRE!!」

「滅尽のサイファア・ストリーム!!」

ドオン!!

火焰を纏った砲弾が撃たれ、それを「極光波竜」が圧縮した光線で掻き消そうとする。しかし砲弾は猛スピードで光の中を掻き分け、やがてドラゴンの口の中に到達、貫通し、「極光波竜」は悲鳴を上げながら爆散した

天城カイト LP1000

「ぐうう…!!」

「ジャガーノート・リーベ」はエクシード素材の数だけモンスターに追加攻撃出来る！「光波竜」に攻撃！FIRE!!」

「光波竜」ツ！」

続けざまの砲撃により「光波竜」も失ったカイト。しかし相手にはまだ「複葉機」がいる、油断はしない

「メイン2、エクシードモンスターが戦闘を行ったターン、エクシードモンスターに重ねてこのモンスターはエクシード召喚出来る！」

「人類最大最後の究極的一撃を以て災禍を撃滅すべし!!」ネガロギア「天霆號アーゼウス」!!」

それは星すらも滅ぼせる人類の積み重ね

最小サイズでありながらデュエルコートをほぼ埋め尽くしても尚、窮屈そうなほどに巨大な体躯、圧倒的存在感

神をも殺す最終兵器がカイトを見下ろしていた

天霆號アーゼウス

ランク12 DEF3000

「なんだ、このモンスターは…!?!」

「これで僕はターンエンド」

「嘘だろ」

「カイトが、押されているなんて…」

目を疑う光景だった

クローバー校最強のあのカイトが押されて、膝をついている。他でもない、自分より弱かったはずの幼馴染の手によって

「ひよつとしたら、風斗が勝っちゃうかも…?」

「わ、わからねえ……」

正直言つて、これはあまりにも高次元なデュエルだった。「光波竜」がフィールドを制圧したかと思えば、見たこともない巨大エクシーズモンスターが圧倒的な火力で「光波竜」を蹂躪する

プロ行きが確実と謳われているほどのカイトと読み合い、互角以上にデュエルしている風斗

「なんで……」

——妬ましい

弱かったはずなのに。いつも後ろに着いてきてたはずなのに。引っ張つてやらなきゃいけない奴だったのに

気がついたら目の前の、遙か遠くにいて

どうして置いていったのだと、どうして引っ張つてくれなかったのだとアレンは喚きたかった

「俺のターン……ドコロオオオツ!!」

アレンの心境とは裏腹にデュエルが進む。気迫の籠った渾身のドローは風圧すら生み出し、対戦相手や観客の髪を靡かせる

「貪欲な壺」を発動!墓地のモンスターカードを5枚デッキに戻し、2枚ドロローする!」

「ここで「貪欲」!?アニメ特有の神引きそういうの本当ズルいなあもう!」

「銀河眼の極光波竜」「銀河眼の光波刃竜」「光波翼機」「光波双顎機」「光波鏡騎士」がそれぞれデッキ・EXデッキに戻り、カイトはそこから逆転出来る2枚のカードを貪欲に狙う

「ドローツ!!」

カイトは引いた2枚のカードを確認し…

カン☆コーン

「…来た!俺は「光波双顎機」を召喚!手札1枚をコストに「光波」モンスターを特殊召喚!「光波鏡騎士」をデッキからフィールドに!さ

らに今墓地に送った「サイファア・エトランゼ光波昇華」の效果で、デッキから「RUM」

「RUM」…!」

「フィールドの「複葉機」の效果により、「光波鏡騎士」と「光波双顎機」のレベルを8に!」

レベル4↓8

『レベル8のモンスターが2体!』

『カイトの勝ちだ!!』

観客の勝利宣言をBGMに、カイトは高らかに叫ぶ
「俺はレベル8となった2体のモンスターで——」

「この瞬間、「天霆號アーゼウス」のモンスター効果発動」

直後、恐ろしく冷え切った声がフィールドに響く

「アーゼウス」のオーバレイ・ユニットが2つ弾けたかと思うと、重厚な音を鳴らしながら胸部を展開し、エネルギーをチャージする

「エクシーズ素材を2つ使う事で、「アーゼウス」を除くフィールド上のカード全てを墓地に送る…この効果は相手ターンでも使用出来る」

『フィールドリセットを内蔵したエクシーズモンスター…!?!』

誰かが恐れ慄くように呟く

強過ぎる、誰もがそう思った。それだけ極悪な効果を持っていながら、エクシーズ次元のデュエリストなら誰でも簡単に召喚出来るほど召喚条件があまりにも緩過ぎるのだから

エネルギーを溜め終えた「アーゼウス」はその胸部から、全身から迸る力を解放し…

ネガロギア・カタストロフ
「神滅の雷火」

破滅の光がフィールドを焼き尽くす

生き残っているのは、機械で出来た巨躯だけだった

「僕の勝ちだな」

そう言う風斗。そんな彼に向かってカイトは
「いいや」

「光波昇華」とは違う最後の手札を静かに

「——俺の勝ちだ」

「死者蘇生」のカードを見せつけた

「なっ」

「甦れ!!」「銀河眼の光波竜」!!」

驚く間もなく復活するカイトの相棒。そして最後の1枚が、カイトの勝利へのキーカード

「そして「RUMー光波昇華」を発動!」「銀河眼の光波竜」を、1つランクが上のエクシーズモンスターにランクアップさせる!1体のモンスターで、オーバーレイネットワークを再構築!!」

「闇に輝く銀河よ!とこしえに変わらぬ光放ち、未来を照らす道標となれ!!ランクアップ・エクシーズ・チェンジ!!」

「降臨せよ!!ランク9!」

ネオ・ギヤラクシーアイズ・サイファアードラゴン

「超銀河眼の光波竜」ツ!!」

超銀河眼の光波竜

ランク9 ATK4500

「アーゼウス」に負けず劣らずの巨体がカイトの背後で漂う。星すらも砕く機械の前に、銀河を瞳に宿したドラゴンが雄叫びを上げた

完全に形勢は逆転した。「光波竜」の進化系ならば、その効果もより強力になっているはず

「……………」

「超銀河眼の光波竜」を見上げながら無言を貫く風斗が小さく震える。その震えの元は恐怖か、怒り、悔しさか

「……プッ」

否、そのどれもが違った

「あ——はははははははっ!!あっはっはっはっはっは、はははははははっ!!」

笑っていた。大爆笑だった。腹を抱えて大笑いする彼の姿に全員が、カイトですらも目を丸くする

「あそこから逆転とかマジかよお！信じらんない…いやあ、ここまで綺麗に負けると逆に清々しいなあ!!楽しかったー!」

こんなに楽しかったデュエルは一体いつぶりだろうかと風斗に取り憑いた名無しの彼は考える

元の世界では先行制圧をするかしないかが勝敗を左右し、勝っても負けてもただただ虚無感が勝り、やがて殆ど作業しているだけのデュエルばかりが続いていた

無論楽しいデュエルもあったが…ここまで負けを受け入れられる、気持ちのいいデュエルは本当に久しぶりだった

外ではアカデミアが侵略している。これはエクシーズ次元の未来を左右するデュエルであり、不謹慎だと思われるも仕方がない

それでも、彼ははつきりと笑顔で言った

「やっぱデュエルはこうでなくっちゃ!!」

「!!……………そうだな…」

思い耽るように目を瞑り、微笑みながら呟く

そして決意を胸に、カイトは最後の動きをする

「銀河眼の光波竜」からランクアップさせた「超銀河眼の光波竜」は、オーバーレイ・ユニットを全て使用する事で、相手フィールドの全てのモンスターのコントロールを奪い、「超銀河眼」に変える!サイファー・スーパージェクション!!」

光が「アーゼウス」を照らし、その体を「超銀河眼の光波竜」に変えてカイトのフィールドに移る

雷霆號アーゼウス↓超銀河眼の光波竜

ATK3000↓4500

「…来いよー」

「超銀河眼の光波竜」で、風斗にダイレクトアタック!!」

空っぽのフィールドを見据えた「超銀河眼」が口の中に熱を溜め…

「戦慄の、サイファー・ストリームツ!!」

光の奔流が、ライフポイントを全て減らした

白星 風斗 LPO

座り込んだ風斗に歩み寄るカイト

「強かったよ、カイト」

「俺もだ。お前とデュエル出来たことを、心の底から誇りに思う」

「照れるなあ」

顔をほんのり赤くして頭を掻く。しばらく経って、風斗は拍手しながら言う

「リーダーおめでどう…ところでさ…さっき強いつて言ってくれたんだから監禁するマネなんてしないよね？自由あるよね？」

ちやつかり目的を達成しようとする辺り、彼は強かだった。しかしそんな彼の思考が筒抜けなように、カイトは笑う

「ああ、そんな事はしないと約束しよう…俺がリーダーになれば、の話だが」

「へ…？」

「みんな、聞いてくれ！」

クローバー校生ほぼ全員の熱視線を浴びてることに気づかない風斗をよそ目に、カイトが聞く

「俺はやはり、風斗こそがリーダーに相応しいとこのデュエルを通じて強く思った!!俺達が失おうとしていたものを取り戻してくれた彼こそをリーダーにしたい!!…賛成してくれるか!？」

『おうっ!!』

「へ？」

その返事を皮切りに、大勢の生徒が風斗を囲み、揉みくちやになりながら話し掛ける

「すげえデュエルだったぜ!!」

「カツコよかった！」

「あんなに強かったなんて知らなかったぞ！」

「一緒にアカデミアを倒そう！」

「頼りにしてるわ、リーダー！」

『リーダー！リーダー！リーダー！』

鳴り止まぬ称賛とリーダーコール。思考停止していた彼は、やがて状況を飲み込み始めると小さくプルプル震え：

「どおしてだよお”お”お”お”お!!!”!!!」

地下カジノに連れていかれた惨めな男のように絶叫するのだった

…それを遠くで見ている少年と、そんな彼を心配している少女に気づかず…

第11話

話はトントン拍子に進んでいった

奇襲された1日目はしつかりと寝て英気を養い、組織編成の為の行動を次の日に開始した

まずは大量の人員と物資、大きな寝床となり得る拠点の確保。拠点の方をアレンを含めた少数精鋭で僕が率いて、カイトには人員の確保と救助、物資調達の大部隊を率いて行動してもらった。今は猫の手も借りたい為、サヤカもここに編成している

その際、カイト達には必ずフォーマンセルで動くよう厳命しておいた。理由はアカデミアが必ずスリーマンセルで行動しているから。ぶつちやけ目も当てられん雑魚ばつかだが、僕が戦った連中が下振れただけって可能性もある。それにただでさえ少ない人員、それもデュエリストが減るような事は今後とも考えて万が一にも避けたい。

『いのちだいじに』だ

こっちは丸1週間は探索したおかげか、アニメで見たことがあるデュエルドームの他、倒壊してない学校や病院、デパートを確保出来た。特に病院とデパートを見つけられたのが大きい。食料や日用品、医療品を同時に確保し、管理出来るのだから

カイト達の方も素晴らしかった。カードにされてない非デュエリストの大人や子供の他、ユート、黒咲が率いるスピード校や名前だけ存在の確認はしていたハート校やダイヤ校の教師や生徒も確保出来た

特に生徒は殆どがデュエリスト。無論ある程度の数が基礎を勉強中の発展途上だったり、戦場に出ることを怖がる者だったが、そこも後々改善し、拠点の防衛戦力として当てればいい

ともかくにも、組織の骨組みがある程度組み立てられ、レジスタンスは動き始める…

とは上手くいかないのが、このARCVの世界なのだ

『納得出来ないっ!!』

「…ハア~~~~~」

「なんだそのため息は!!」

「このクソ忙しい状況で下らない事言うからだろうが、黒咲隼」

仮初の司令室にて様々な作戦立案や書類整理をやっている中、突如やってきたのはユート、黒咲隼と他2人を筆頭としたダイヤ、ハート校の生徒達

こいつらが僕の元に来た目的というのが…

「お前が俺達を率いてリーダーをするなどと、俺は納得がいかん!!」

…というものだ

結果として、戦争初日で僕が発案、実行してしまったレジスタンスの組織作り。各地で散発的ゲリラ活動を行っていた面々や一般人の被害者をじわじわと取り込み、大世帯になってきた組織を運営していくにあたり、リーダーとなってしまう僕1人では当然手が足りないそこで、集まった面々の中で優秀な人間…特に戦線を指揮する実力者を幹部に据えようと考え、カイトやユートや黒咲、その他のデュエリスト達に呼び掛けを行った

それがご覧の有様だよ

「百歩譲ってカイトがやるならばまだいい!だがデュエルを途中で投げ出すような奴にリーダーが務まるわけがなからう!お前への心象を抜きにしても信用出来ん!」

「…だからユートにリーダーの座を渡せと?」

「そうだっ!」

「隼、よしてくれ」

「ユート、お前はこいつに任せていいと言うのか!」

「やる者が誰もいなく、必要とされるならば構わない。しかしこれ程多くの人達を纏めあげているのは彼の手腕あってこそ、それを横から掠め取るのは良くない」

「しかし…!」

ユートが黒咲を説得するが奴は渋るのみだ

…ぶっちゃけた話、リーダーの座を譲るのは全然いいのだ。そもそも僕にはカリスマとか人望とかあまりないし、レジスタンスを維持す

る作業もリーダーがやるわけではないし（人材があまりにも少ないから今は僕を中心とした数人でやっている）後々の目的を考えてリーダー抜きで…正確には僕抜きでも組織が回るよう教育もしていく予定なので、ユートがやるならば全然構わない。原作通りだし

ただ、そうは問屋が卸さないのが現状

「ちよつと待ちたまえ！リーダーに相応しいのは彼でも、君でもない！即ち、ダイヤ校のトップデュエリストでもあるこのぼく…『因士よすがしナイト』こそがなるべきだと思わないかい!?」

そう、このクソやかましく、キラキラしてて、自己主張の激しい色んな色が混在してる頭髮のナルシストなアホこそが、事態をややこしくしてくれてる元凶の1人と言える

「キャラ濃いなあ…」

こいつはダイヤ校で1番強いデュエリストであり、先ほど言った幹部候補の1人でもあるのだが…自分が目立つ事に余念がなく、所謂勉強が出来るタイプの頭が悪い人間だ。こんな奴にレジスタンスを任せたら3日で崩壊しそうだし、部隊長の話すらも取り消すことを視野に入れねばならんレベルだ

「真っ暗になってしまったハートランドを照らすには、何よりも輝かしい象徴こそが必要なのさ！地味な彼風斗や闇属性を好む君ユートやこいつユートなんかよりも、ぼくがなるべきなのだっ！みんなの為にも！」

「何を言う！それを言うならばやはりユートこそが相応しい！弱卒のダイヤは黙っている!!」

「何おう!?!」

「何だ!?!」

「やかましいガキ共!!静かにしろ!!」

仕事に集中出来んだろうが！アニメの世界に來ても尚仕事をしてる僕への当て付けかクソがつ！

怒鳴ると喉が痛くなってきたので水を飲む。そうして喉の熱を誤魔化しながら座り直し、彼女彼女に向かって声を掛ける

「それで……お前もそっち側なわけ？あきひかり空光」

「はい。皆様に頼まれてしまった手前断る訳には…それに、皆様を率

いる役職というのも楽しそうですし」

「後半の理由で台無しだよ…」

彼女の名前は『空光 ヨツバ』。アホナイトと同じく幹部候補生であるハート校のトップエース、ハートランドじゃ知らない者はいない名家のお嬢様らしい

絵に書いたお嬢様らしくお淑やかで上品、優しくて物腰も柔らかく、抜群の美少女。おまけに成績最優秀でデュエルの腕もいいというどこの完璧超人だと言いたくなるレベルに完璧な女の子だ

「それとヨツバと呼んでくださいな。お友達ですしお仕事を一緒にした仲でもあるじゃないですか」

「勘弁…」

ちなみに、組織を維持する手伝いをしてもらってる数少ない協力者でもある。この子、超優秀なのだ。だからか、アレンやサヤカ、カイトに次いで面識のある子になっている

正直、女の子と接する機会が皆無だった身としては、結構グイグイ来る彼女にタジタジになってしまうことも多々ある

あと、因士の奴が妙に空光を敵視してる気がする。まあこのアホの事だから、自分より目立つ彼女が気に食わんとかその程度の理由だろう

「とにかく、お前らの提案は却下だ却下。別に今の立場に固執しちやいない（むしろ捨てたい）が、アカデミアの奇襲から2週間…まだまだ問題は山積みで、下らん内ゲバを起こしてる暇はない。分かったらさっさと持ち場に戻れ」

「ふん！そんな事を言っておいて、実際は今の立場をなくすのが恐ろしいだけだろう？」

「全く、これだから低俗な者達は困るねえ」

「目立ちたいだけのあなたにだけは言われたくないですよ」

「猫かぶりが何を言ってる」

ブチッ

「いい加減にしろテメエらア!!」

言ってる傍からしようもない喧嘩を始める姿に堪忍袋の緒が切れ

て、書類整理を中断して叫ぶ

「状況が分かってねえのか!? 敵は1つの次元が一丸となって襲ってくる軍事国家だぞ、戦争だぞ!! 敵の撃退もそうだが、難民の救助に物資不足も大問題だ!! 戦争が長引けばこちらは困窮し、困窮が長引けば難民が暴動を起こす可能性だって大だ!! そんな事になれば大きな隙が出来て、一気に奴らに攻め込まれて全滅する!!」

「うっ……」

「そ、それは……」

「……………」

「今この瞬間も、罪のない市民がエクシース狩りと称してカード化されている!! カードゲームでだぞ!? こ、こんな、こんな理不尽でバカげた話があつてたまるかあつ!!」

ハア ハア ハア

(クソ、相手は子供だぞ!? 子供相手に何怒鳴ってんだ! いい歳した大人が…情けない!)

息を整え、頭を冷やしながら、自分が起こした行動に嫌悪する。椅子に座り、努めて落ち着いた口調で言う

「分かった、もう良い。従いたくないなら従わなくていいし、抜けたきゃ抜ければいい。でも、頼むから僕達の邪魔だけはしないでくれ、頼むから」

目を伏せながらそう言い切つて、書類仕事に戻る。頼むから出ていってくれと祈りながら

「白星」

祈りは通じず、黒咲がこちらに語り掛ける

「…軽率な事を言つて悪かった。お前にも、お前なりの強い意志があるということとは理解した」

「え……あ、うん」

文句でも言われるのかと思つたら、まさかの謝罪の言葉に思わず返事が遅れた。続けて、因士と空光も謝ってくる

「も、申し訳なかつた……」

「ごめんなさい、風斗さん」

「い、いや、僕も大人げなかったよ。怒鳴ってゴメン」

互いに謝れば、気まずい空気が周囲を漂う。そんな中、黒咲は僕に告げる

「しかし、お前が上に立つことに不満を抱いている者がいるのも事実だ。それを放置して事を進めれば、それこそお前が望まない内部分裂に繋がるのではないか？」

「むっ…」

そう言われてしまえば、確かに無視する訳にはいかない。さつきは抜ければいいと言ったが、実際にそんな事をされれば拠点の建設や防衛、物資索敵任務に支障が出てくる。アカデミアに対してジリー・プアー（徐々に不利）になる事は間違いない

「どうすればいいと思う？」

「さつきの話を全員が聞けば、大部分が大きく反対することはなくなると思うが」

「喉が枯れるわ」

今もイガイガして痛いんだよ。それを差し引いても大勢の子供に怒鳴るなんて精神衛生上に悪いことはあんまりしたくない。しないに越したことはない

「みんなが僕を認めてくれる方法…」

そういえば、クローバー校のみんなにはどうやって認めてもらって……あっ

「そうだ、デュエルしよう」

「……何？」

そうだ、あるじゃないか

この世界特有の、たった一つだけの冴えた方法が

後日、デュエルスタジアムの観客席は大勢の難民やスピード、ハート、ダイヤの生徒や教師が集まっていた。クローバーのみんなには悪いが今日だけ拠点の防衛に当たらせてもらってる為、観客席にはいない

方法は単純明快、僕と立候補者3人と同時にデュエルを行い、その

内容を見せつけなければいいのだ。正直1vs3でやりたかったのだが、流石に実力者3人同時は先行制圧に頼らざるを得なくなり、そうなればあまりに酷い絵面に逆に反発する者が増えるかもしれないから出来なかった

同時に難民にこのデュエルを見せる事で娯楽を提供し、ストレスを発散させるという目的もある。ぶっちゃけアカデミアの侵略でデュエルに対する心象が悪い可能性も加味して自由観戦にしたのだが、思ってた数倍は見に来てビックリしてる。多分侵攻からあまり日が経っていないのが理由だろう

中心のデュエルコートには右回りに僕、因士、ユート、空光の4人が虚空を囲むように佇んでいる

「準備はいいね?」

「もちろん!」

「ああ」

「構いませんわ」

「では……」

「デュエル」「デュエル!!」

「僕が最後のターンプレイヤーになるようにだから、先行は因士からだな」

「フッフ、華麗なぼくのデュエルを見せてあげるよ!」

さて、今回のルールはバトルロイヤルルール。1ターン目はドロ―不可、各プレイヤーは最初のターン、バトルフェイズには移行できないという仕様だ

「ぼくは「^{サテラナイト}星囚士 デネブ」を召喚!」

出てきたのは、銀と金の鎧と二重螺旋の剣を装備した真っ白に輝く肌の女の子。踊り出てくるその姿は、まるでバレリーナのような可憐さがあった

「テラナイト」。ほぼ光属性、戦士族で統一されたランク4エクシーズテーマであり、鬼みたいな展開力こそないものの、「デネブ」の存在や

戦士族故に「増援」などのサポート層が厚い点から、安定性のあるデッキと言える。また、「星守の騎士」テラナイト プトレマイオスは「N.O.」ナンバースを除いたあらゆるエクシーズモンスターに進化する効果を持っていて、一時期はプトレノヴァインフィニティなんて魔の呪文が流行ったくらいだ

しかし、それはあくまで「テラナイト」が他のテーマの強力なエクシーズと組み合わせるこそ真価を発揮するデッキであり、テーマ以外のカードを組み合わせないアニメ時空の価値観を考えれば、大きな脅威とはなり得ないだろう

「ん〜！今日もぼくのモンスターは輝いている！」

「はよ進めんか」

「おつと失礼。召喚した「デネブ」のモンスター効果により、デッキから「星因士 アルタイル」を手札に加えるよ。ぼくはカードを2枚セットしてターンエンド」

エクシーズ召喚しないのか。でも伏せ2枚を考えれば堅実な出だしではあるか

さて、右回りなので次はユートのターン

「俺のターン、ドロ〜！俺は「幻影騎士団^{ファントム・ナイト}ティアースケイル」を召喚！さらに他の「幻影騎士団」モンスターがいる時、「サイレントブーツ」は手札から特殊召喚出来る！」

上半身だけの甲冑と籠手を、そして茶色い布切れと消音靴を身につけた青い亡霊が2体現れる

「幻影騎士団」。レベル3と4のモンスターが主体のデッキだが、最大の特徴は「幻影騎士団」罨カードはその多くがトラップモンスターなのだ。墓地除外で発動するカードも多い為、リソースが中々途切れない。テーマ統一でも強い部類だ

しかもズアークの分身体でもあるユートは「ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン」系統も使う為、油断すれば一気にライフを削られるだろう

「手札の「クラックヘルム」を捨て、「ティアースケイル」の効果発動！デッキから「サイレントブーツ」を墓地に送る。そして墓地の「サ

イレントブーツ」「クラックヘルム」をゲームから除外することでそれぞれ効果を発動！「クラックヘルム」はターン終了時にデッキの「幻影騎士団」カードか「ファントム」魔法・罫を手札に加えることができ、「サイレントブーツ」はデッキから「ファントム」魔法・罫カードを手札に加えることが出来る！俺は「幻影霧剣」を手札に：ファントム・フォッグ・ブレードそして！レベル3の「ティアースケイル」と「サイレントブーツ」でオーバレイ！」

「戦場に倒れし騎士たちの魂よ！今こそ蘇り、闇を切り裂く光となれ！」

「エクシーズ召喚！現れろ！ランク3「幻影騎士団ブレイクソード」！！」

鉄の黒馬に跨がい、大剣を肩に置くデュラハンがおどろおどろしい叫びと共に現れた

幻影騎士団ブレイクソード

ランク3 ATK2000

「俺はカードを2枚セットして、エンド時に「クラックヘルム」の効果で「幻影騎士団フラジャイルアーマー」を手札に。これでターンエンド」

あの伏せられたカードの内1枚はおそらく「幻影霧剣」だろう。「ブレイクソード」は破壊時に墓地の「幻影騎士団」を蘇生する効果も持っている。なかなか攻めにくい盤面を作ったな

「では、わたくしのターンですね」

カードを引く空光。彼女はこちらを見ながら言う

「そういえば、風斗さんはわたくしがどのようなデッキを使うのか知りませんでしたわね？」

「まあ、そうだね」

「平たく言えば「人形」ですわね。僭越ながら「人形使い」の名で呼ばれていますの」

へく、人形かあー。「プリンセス・コロン」ってカードが漫画版ZE

XALにはあるのだが、それ系統のテーマかな？

「…しかし、わたくしを前に初ターンでエクシースモンスターを出すとはなかなか度胸のある方で…」

うん？どういう意味だ？

「ではさっそく……………」

わたくしは「ギミックパペットーギア・チェンジャー」を召喚」

……………はい？

「さらに相手フィールドにモンスターが存在し、自分フィールド上に「ギミックパペット」モンスターのみがある場合、手札の「ギミックパペットーマグネ・ドール」は特殊召喚出来ます。「ギア・チェンジャー」の効果、このモンスターのレベルを自分の他の「ギミックパペット」モンスターと同じレベルに変更出来ます。「マグネ・ドール」と同じレベル8に」

磁石をくっつけて構成された人形と胴体がギア駆動の頭部のない人形が同時に出てきて、「ギア・チェンジャー」が左腕で無造作にレバーを動かすと、瞬く間に同じレベルのモンスターが2体揃う

レベル1↓8

「に、人形使って…まさか…」

「わたくしはレベル8の「マグネ・ドール」と、レベル8となった「ギア・チェンジャー」の2体でオーバーレイ！」

疑問に答えられることもないまま、奇怪な人形達は光の球となって渦の中に消え、中心で爆発を起こす

そして現れるのは…不気味に脈動する巨大な心臓。それが内側から展開され、やがて巨大な人形へと姿を変える

「現れなさい、」^{ナンバーズ}「No.15」

「運命の糸を操る地獄からの使者。漆黒の闇の中より、舞台の幕を開

けなさい！エクシードズ召喚！」

「ランク8！「ギミックパペットージヤイアントキラー」!!」

玉座に座った黒い人形が、虚無の瞳で虚空を見つめ、糸で蠢いた
No. 15 ギミックパペットージヤイアントキラー

ランク8 DEF2500

見上げるほどのその巨体。各所で悲鳴が聞こえてくる中、僕は心の中
中で叫んだ

「さあ、喜びを噛み締めて受け取りなさい！わたくしの「フアンサー
ビス」を!!」

お前、IVモチーフのキャラかよおおおおっ!!?

第12話

ギャップというものをご存知だろうか？

単語としての意味は裂け目・割れ目・隙間・隔たり・欠落・空白・相違・格差・不均衡といったところか。そこから更に突っ込んで、悪そうな見た目に反して凄くいい奴だったとか、なんでも完璧な女の子が実は料理だけは壊滅的に苦手だとか、印象と現実に大きな相違・格差を感じるという俗な意味合いがある

僕は今：それを身をもって体感してる

ギミックパペット・ジョイアントキラ

ランク8 DEF2500

「う、嘘だあああああつ!!」

空光が！あのお淑やかで！上品で！優しくて！完璧超人な空光がIV枠ウ!?何の冗談だよオイ!?

「^{フォー}IV」。本名、トーマス・アークライト。この世界の前作、「遊戯王ZEXAL」の1期に登場した敵キャラであり、甘いマスクと物腰柔らかな性格、日本チャンプになるほどのデュエルの腕を持った完璧超人――というのは仮の姿

その本性は「希望を与えられ、それを奪われた時に見せる美しい顔を相手に与える」ことをファンサービスと称する生粋のサディストであり、初登場回ではその凄まじいインパクトで遊戯王界限を賑やかしたほどの男だ

そう、男：IVは本来男なのだ。確かに、「白星ふうと」の幼馴染である神月アレンのモチーフである「神月アンナ」も女の子であった事を考えれば、性別が変わってても不思議ではない：不思議ではないが

ギャップがつ！IV以上に！激しいんだよっ!!

この世界で4番目には仲が良い子が晒した本性によるギャップで脳が焼き切れそうだ。4番目に仲が良いだけにIV枠ってか？やかま

しいわっ！

待てよ、もしかしてIVだから四葉ヨツバって名前……あ、ああ！よく考えたら空光あきひかりってのも

空光あきひかり↓空 光あき↓アークライトライト

……って読めるじゃん!?事前知識なしじゃ分つかんねえよこんなの!

「ウフフフ、楽しい楽しいファンサービスの始まりです!」

「おのれ!本性を表したな悪鬼め!」

「これが『エクシーズキラー』と噂されるモンスターか……!」

「ちよつと待て聞き捨てならないワードが!」

そりゃ「エクシーズキラー」だろうよ!そりゃ強いだろうよ!エクシーズ次元限定ならこいつほど猛威を振るうモンスターはそうそう居ないよ!

「さあ、無駄話はおしまいですよ!「ジャイアントキラー」のモンスター効果!オーバーレイ・ユニットを1つ使用し、相手の特殊召喚したモンスターを1体破壊!」

「させん!永続罫「幻影霧剣」発動!このカードの対象となったモンスターは攻撃と効果の対象にならず、自身の効果も無効化される!これで「ジャイアントキラー」を……」

「速攻魔法「サイクロン」!」

公開された「幻影霧剣」から亡霊を纏う剣を射出されるが、同じく「サイクロン」から吹き出した竜巻が霊剣ごと「幻影霧剣」のカードを粉碎する

「「幻影霧剣」破壊!永続罫である「幻影霧剣」は効力を失いますわ!」「ジャイアントキラー」の手から伸びた複数の糸が「ブレイクソード」を捕え、自分の元に引つ張ろうとするが……

「ならば俺はさらに「幻影翼」を「ブレイクソード」を対象に発動!「ブレイクソード」の攻撃力は500ポイントアップし、このターンの戦闘及び効果では1度だけ破壊されない!」

翼の幻影がデュラハンの背中で羽ばたいかと思うと「ブレイクソード」は糸を力づくで引きちぎった

ユートは安心した顔をするが、そこで因士が叫ぶ。そう、「ジャイアントキラー」は…

「ダメだ！「ジャイアントキラー」の効果は！」

「そう、残念ですが「ジャイアントキラー」は1ターンに2度までこの効果を使えますの」

「なんだと!?!」

「「ジャイアントキラー」の効果を再び発動！」

掌から飛んだ細い糸が、今度こそ「ブレイクソード」を捕らえる。そのままゆつくりと「ジャイアントキラー」の方に引っ張られる。「ブレイクソード」に待つのは…開かれた胸部の入り口で凶悪に回転する粉砕機

「な…ま、まさか!?!」

ユートが察するがもう遅い。「ジャイアントキラー」の胸部まで引っ張られた「ブレイクソード」は粉砕機に無理やり引きずり込まれる

『グオオオオオッ!!』

苦悶の声をあげ必死に逃れようと抵抗するが、抵抗虚しく嫌な音を立てながら徐々に粉砕されていく

ギヤリギヤリギヤリギヤリギヤリギヤリ!!!

『グオオオオオアアアアアッ!!』

「ブ、「ブレイクソード」…」

あまりに凄惨な光景に会場にいるチビツ子達は泣き喚き、それ以外は殆どが閉口する。ハート校の生徒だけが慣れた風に眺めていて、空光に至っては鼻歌を歌ってる始末。じゃ、邪悪が過ぎる…!

「そして、破壊したモンスターがエクシーズモンスターならば、そのモンスターの元々の攻撃力分のダメージをコントローラーに与えます
!」

「何!?!」

そして「ブレイクソード」を粉砕し切った胸部の穴から巨大な砲塔が顔を覗かせ、赤いエネルギーをユートに放つ

「ディストラクション・カノン!!」

「ぐわああああっ!!」

ユート LP2000

「くっ…しかし、「幻影騎士団」は倒れない！破壊された「ブレイクソード」のモンスター効果！墓地の「幻影騎士団」を2体特殊召喚し、そのレベルを1つ上げる！甦れ、「幻影騎士団」達よ！」

幻影騎士団ティアースケイル

幻影騎士団サイレントブーツ

レベル3↓4

「あら、モンスターを残しちゃいましたか…では、わたくしはカードを2枚セットして、ターンエンドしますわ」

「僕のターン、ドロロー、スタンバイ、メイソ」

「…何故わざわざフェイズ宣言を？デュエルディスクが自動でしてくれますのに」

「クセになってんだ、フェイズ宣言するの」

あとアニメ特有の「発動してたのさ！」を極力避ける為。演出としては必要かもしれんが実際にされたら溜まったもんじゃやない

しかし「ギミックパペット」かあ…今使ってるデッキとの因果を感じさせてくれるな…

「僕は手札の「サイレント・アングラー」をコストに「ワン・フォー・ワン」発動。デッキのレベル1モンスター「^{プリンセス}鯽っ子姫」を特殊召喚。「鯽っ子姫」は召喚・特殊召喚時に自身を除外、デッキから「鯽っ子姫」以外のレベル4以下の魚族を特殊召喚出来る。「カッター・シャーク」を特殊召喚」

フィールド上にティアラを被った小さい鯽のプリンセスが現れる。それは除外する際の穴を通って即座に消えるが、入れ違うように赤紫の体皮が目立つ、ヒレに丸鋸がついた機械めいた鯨が出てくる

「魚族？聞いていたデッキと内容が違う…」

ユートが呟く。約2週間の間、会敵したアカデミア兵は全部「列車」パワーで瞬殺していたからな。聞いていたとはきつとその時のデュエル内容だろう

「お前らを同時に相手して脳筋デッキで勝てるとは思っちゃいない

さ。自分フィールドの水属性モンスター1体を選択して「カッター・シャーク」の効果を発動する。対象は「カッター・シャーク」自身。対象と同じレベルでカード名が異なる魚族を守備表示で特殊召喚する。この効果で特殊召喚したモンスターはこのターン効果は使用出来ない。「ライトハンド・シャーク」を特殊召喚」

「レベル4のモンスターが2体…!」

「カッター・シャーク」と「ライトハンド・シャーク」でエクシーズ召喚」

頭上の穴からストロビラ幼生と呼ばれるクラゲを模した塔型の何かが現れる

その中心が展開して黄色い球体の口内と赤い目を見せ、鋭い刺胞しほうを備えた触手を生やす。そして胴体の左右から伸びた刃状の突起部分、その右側に独特な「04」の数字を浮かび上がらせる

「偉大なる先輩、ここに降臨。「No. 4 猛毒刺胞ステルス・クラージェン」

巨大なクラゲの怪物が、眼下のデュエリスト3人を睥睨した

No. 4 猛毒刺胞ステルス・クラージェン

ランク4 DEF1500

「な、「No.」!?!」

「何!?!」

「ど、どうして風斗さんが「No.」を!?!」

驚きの反応を見せる3人。特に空光の動揺はひとしお大きい

「風斗さん、いったいそのエクシーズモンスターをどこで手に入れたのですか!?!教えてください!?!」

「カードは拾った」

「こんな時にふざけないで下さいます!?!」

怒られた

とはいえ、こことは違う世界のパックで当てたと言われても正気を疑われるだけだし、どうしたものか…あ、そうだ

「ある日突然、これらのカードが入った箱が部屋から見つかって…言っとくけどこれは本当だぞ。絶対に嘘はついてない」

1番大事なところは隠してるけど

「そんなこと…しかし…でも…」

中々事実を呑み込めないのか、うんうん唸ってるが今はデュエル中
だと言うことを思い出してもらおう

「ステルス・クラージェン」がフィールドにいる限り、全てのモンスター
は水属性となる」

「小癩な…」

「そして「ステルス・クラージェン」は自分・相手メインフェイズに1度
だけ、相手フィールド上の水属性モンスター1体を破壊し、さらにそ
の攻撃力の半分のダメージを与える」

「ジャイアントキラー」と同じ効果!?この為になたたくし達のモンス
ターを水属性に…」

「いや、「ジャイアントキラー」と違いエクシーズでなくともダメージ
を与えてくる。しかもこちらのターンでも効果が使えるとなれば、俺
達は容易にモンスターが出せなくなる…!」

ユートの言うように、これは僕なりに考えたバトルロイヤル…とい
うより対アカデミア用に構築したデッキ（ver. エクシーズ）だ。
切り札1体出すだけで満足する事が多いこの世界のデュエリストは、
このモンスターを1体出しただけで大抵積む

てか「ステルス・クラージェン」が1番有効に働いてるだけで、元々
「バハムート・シャーク」からの「餅カエル」や「深淵に潜む者」、「未
来皇ホープ」からの「未来竜皇ホープ」に「アーゼウス」まで妨害札
はなんでもござれだ。おまけに「御前試合」も入れてる為、「ステルス・
クラージェン」がいる状態で出されればエクシーズ次元で突破出来る人
間はいないや、ユートや黒咲やカイト辺りは超えてきそうだな

「さあどうする?カードを発動するタイミングは今ここしかないぞ
?」

「さらに対象を選ばない効果…!?くっ…」

「速攻魔法「天架ける星囚士」を発動!ぼくの「デネブ」をデッキに戻
し、代わりに「ベガ」をデッキから特殊召喚する!更に「ベガ」が特
殊召喚に成功した時、手札から「シリウス」を特殊召喚!」

白鳥の戦士が因士の元に帰り、代わりにこと座としし座を司る戦士が飛び出してくる

「…仕方がないですね！わたくしの場に「N.O.」が存在する時、このカードは発動出来ます！永続罫「ナンバーズ・ウォール」！」

あれは…なんだっけか？マイナー過ぎてよく覚えてないが、ここで使うということは破壊耐性付与か？

「このカードがある限り、フィールド上の「N.O.」は効果で破壊されなくなり、さらに戦闘でも「N.O.」以外の戦闘では破壊されなくなりま

す！」

うん？それってつまり…

「ただし、わたくしの「N.O.」モンスターが破壊されれば、このカードは破壊されます！」

「ちよつと待ったあ！それだと彼^{風斗}が出した「N.O.」も強化されないかい!？」

因士の言う通り、「ナンバーズ・ウォール」のテキスト通りならこつちの「ステルス・クラーゲン」も戦闘・効果耐性が付与されることになる

でも先輩（ステルス・クラーゲンを指している）は「ライトハンド・シャーク」をエクシーズ素材にしてるから戦闘耐性は既に付いてるし、効果破壊に対しても先輩独自の対策があるから、ぶっちゃけ特に恩恵がないから面倒臭い

「しようがないでしょう!?!こうでもしなければこちらの「ジャイアントキラー」が破壊されるのですから!」

「だからってあんな厄介なモンスターに塩を送るかい普通!?!」

「うるさいですわね!あなたって人はいつも!」

「なにおう!?!」

「なんですか!?!」

ええいやかましいっ!喧嘩を中断させる為にデュエルを強引に続行させよう

しかしどうしたものか。「ジャイアントキラー」は論外として、「ベガ」を破壊しても因士の手札には「アルマイル」があるから、もし別

の「星因士」がいればエクシーズ召喚される

一方ユートも厄介だ。「ダーク・リベリオン」の召喚を阻害するとう意味では「幻影騎士団」を狙ってもいいと普通は考えるが、「幻影騎士団」は墓地除外で発動出来る効果持ちが殆どだ。ユートの場に残ってる「ティアースケイル」は墓地からの蘇生、「サイレントブーツ」はサーチ

ここは…

「……僕は「ステルス・クラウン」の効果で「幻影騎士団ティアースケイル」を使う」

「ティアースケイル」なら墓地蘇生を使われてもレベル4になっている「サイレントブーツ」とはレベルが合わないからエクシーズ召喚は出来ない。ダメージが少ないのは残念だが、サーチされて逆転札を手札に加えられるよりは遥かに良い

「ポイズン・スティックス」

4本の触手が伸び、刺胞を鎧の亡霊に突き刺す。毒は何故か幽霊にも有効で、「ティアースケイル」は苦しみ悶えたのちに消滅した

ユート LP1700

「くっ……!」

「カードを2枚伏せてターンエンド」

仕込みは終えた。残り手札は2枚、後は破壊カードを引かれなければどうにかなるはず

「僕のターン、ドローウー!」

やたらキザったらしい態度と共にドロー時の掛け声がエコーする。挙動の一々がうぜえ…

「スタンバイフェイズに永続罫「御前試合」発動」

「「御前試合」?なんだいそれは?」

「このカードがフィールド上に存在する限り、互いにフィールド上に存在するモンスターは一種類の属性のモンスターに制限される」

「ハッハッハー!じゃああまり意味はないねえ。何せ僕の「テラナイト」モンスターは光属性で統一されているからね!相性が悪かったね!」「御前試合」が、自分のデッキには効かない事に高笑いする因士の姿を

見て、内心ほくそ笑む。ああ、確かに相性は『悪い』な…

「……………まさかつ!？」

そして因士がモンスターを召喚する直前、空光が状況に気づいて青ざめる。もう気づいたのか？流石だな空光

「さあ行くよ!」「星因士デネブ」を召喚!」

ビーツ! ビーツ!

「うわっ!?エ、エラー?どうして?」

「言ったら、種類の属性しか場に出せないって」

「何言ってるんだい!?!僕が召喚しようとしたのは光属性の『デネブ』!僕のフィールドにいるモンスターは…全て…」

大声で抗議する因士だが、自分フィールドに存在するモンスター達の属性を見て、徐々に声が小さくなっていく

「み、『水属性』…………」

「そう、お前達のモンスターは全て「ステルス・クラーゲン」により水属性に変わっている。「ステルス・クラーゲン」と「御前試合」、どちらかを処理出来なければ水属性以外のモンスターの召喚は不可能だ」

「な、なんだと…!?!」

3人はそれぞれ闇、光、闇属性モンスターを主軸としたデッキ。当然エクストラデッキのモンスターも統一されていることを考えれば

…

「さあ、どうするっ!」

苦々しい表情を浮かべるユートと空光と因士を前に腕を組みながら、僕は問い掛けるのだった